

人生の意味の心理学モデルの構成 ——人生観への統合的アプローチにむけて

浦田 悠 名城大学大学院総合学術研究科

Yu Urata Graduate School of Environmental and Human Sciences, Meijo University

要約

人生の意味についての心理学的研究には、一定の知見の蓄積はあるものの、いまだ哲学的な理論背景と実証研究を統合するような包括的な理論モデルは見られない。そこで本論文では、やまだの質的データからのモデル構成の方法論を参考に、人生の意味についての統合的なモデルの構成を試みた。ここでは、Ⅰ基本枠組・Ⅱ基本要素・Ⅲ基本構図の3つのモデルを構成した。構成プロセスとしては、哲学・人間学・心理学の理論から理論的な枠組を構成する一方（Ⅰ基本枠組の構成）、心理学における先行研究で見られている様々な意味の類型に関するデータをまとめて分類した（Ⅱ基本要素の構成）。そして、最終的にこれらの基本要素と基本枠組を媒介し、包括的に関係づける構図を構成した（Ⅲ基本構図の構成）。モデルでは、人生の意味の4つの基本的な原理として、「個人的意味」「関係の意味」「社会的／普遍の意味」「宗教的／霊の意味」を提示した。これらの原理は、「個人的意味」から「関係の意味」へ、さらには「社会的／普遍の意味」から「宗教的／霊の意味」へと展開する入れ子構造として捉えられた。最後に、意味システム・アプローチによって事例の分析を試みた。このモデルによって、これまで曖昧であった人生の意味の「幅」や「深さ」といった概念をより明確化するとともに、個人の多様な人生観を捉える新たな方法論やモデルを生成する可能性を模索した。

キーワード

人生の意味、モデル構成、意味システム・アプローチ

Title

Model Construction for the Psychology of Meaning of Life: Toward Integral Approach to the View of Life

Abstract

In psychology, a number of studies have examined ideas of the meaning of life, but no comprehensive model has been developed that integrates philosophical foundations and empirical research. This study constructed an integral model for concepts of the meaning of life using a model construction methodology based on qualitative data. Three models were constructed: Framework (Model I), Element (Model II), and Composition (Model III). Model I was a theoretical framework model based on philosophical, anthropological, and psychological theories. Model II was constructed using categorization data on the meaning of life drawn from various sources in previous studies. Model III was constructed by integrating Models I and II. These models proposed four fundamental principles underlying concepts of the meaning of life: Personal, Relational, Social/universal, and Religious/spiritual. These principles formed a "nested" structure that unfolds from Personal to Relational to Social/universal to Religious/spiritual. In addition, some typical cases were analyzed by assessing structural properties of meaning systems. The model may provide a comprehensive framework for understanding concepts such as "depth" and "breadth" as associated with concepts of the meaning of life.

Key words

meaning of life, model construction, meaning system approach

| |
|-------|
| 問題と目的 |
|-------|

「人生の意味とは何か」。この問いは、問う者自身さえ何を問うているのかわからなくなるような、はなはだ漠とした問いでありながらも、切実な何かを鋭く問う問いかけであり、古来、哲学者や文学者や宗教者のみならず、市井の人々によっても真剣に問われ続けてきた永遠の問いである (cf. Debats, 2000; Durant, 2005; Friend et al., 1991; Gabay, 1996; Hanfling, 1987; Kenyon, 2000; Kinnier, Kernes, Tribbensee, & Van Puymbroeck, 2003; Klemke, 2000b; Runzo & Martin, 2000; Seaman, 2005)。

心理学の領域では、フランクル (Frankl) による実存分析の理論をその源流として、人生の意味 (meaning of life, meaning in life) に関して一定の研究が蓄積されてきた (e.g., Reker & Chamberlain, 2000; Wong & Fry, 1998)。それらの研究は、尺度を作成し、主観的な意味感や目的感を測定する量的な研究 (e.g., Crumbaugh & Maholick, 1969; Reker, 1992; Steger, Frazier, Oishi, & Kaler, 2006; Wong, 1998a) と、自由記述や面接調査によって、経験される意味の内容を分類する質的な研究 (e.g., DeVogler & Ebersole, 1980; Ebersole, 1998; Ebersole & DePaola, 1987; O'Connor & Chamberlain, 1996) の2つの流れに分けることができるが (浦田, 2007b)、近年、ナラティブ・アプローチ (e.g., McAdams, 1985, 1990) や構成主義的アプローチ (e.g., Neimeyer, 2000)、そして意味システム・アプローチ (e.g., Dittmann-Kohli, 1990; Dittmann-Kohli & Westerhof, 2000; Heine, Proulx, & Vohs, 2006; Hermans, 2000; Leontiev, 2007a; Park, 2007; Pöhlmann, Gruss, & Joraschky, 2006) など、新たな観点からの検討も見られるようになってきている。

これらの先行研究における理論的なモデルとしては、リーカーとウォン (Reker & Wong, 1988) による意味の4つの次元 (「意味の構成要素」「意味の源」「意味の幅」「意味の深さ」) や、バウマイスター (Baumeister, 1991) による意味への4つの欲求 (「目的」「価値 (正当化)」「効力感」「自己価値感」) などが挙げられる。とくにリーカーとウォンのモデルは、

それまでの実証的な研究を総合的にまとめた理論モデルであるといえる。しかし、個人的意味を認知や情動の現象に還元しようとするこれらの試みは、本質を十分に捉えることには成功しておらず (Leontiev, 2007a)、またこれらの理論的・概念的なアプローチの多様さが、実証的な知見の統合を困難にしている (Reker & Fry, 2003)。しかし、さらに根本的な問題としては、そもそも心理学において「人生の意味」という概念の意味についての哲学的・人間学的な背景にあまり自覚的に注意が払われてこないまま知見が蓄積されてきたということが挙げられる。今後、これまでの実証的な研究における多様な知見を有効に踏まえつつ、新たな知を生成する基盤を築くためには、それらの知見と理論的概念との連関を統合的に示すことができるような包括的で生成的なモデルが不可欠である。

そこで本論では、これまでの人生の意味についての概念的な問題についての理論と実証的な研究で得られているデータをもとに、それらを包括的に整理するようなモデルの構成を試みる。その際、ここでは、やまだ (1986, 2002, 2006) による質的データからのモデル構成の方法論を参考にする。モデルとは、「関連ある現象を包括的にまとめ、そこに一つのまとまったイメージを与えるようなシステム」 (印東, 1973) であり、モデル構成においては、I 基本枠組・II 基本要素・III 基本構図という3つのモデルが構成される¹⁾。モデル構成のプロセスとしては、まず生の質的データから基本要素をボトム・アップで構成する一方、基本枠組を理論からトップ・ダウンで作成し、最後に基本要素と基本枠組を媒介し、包括的に関係づけるような基本構図を構成する。

このやまだの方法論を踏まえ、具体的には図1に示すようなプロセスで人生の意味についてのモデル構成を行う。

まず、これまでの哲学や人間学および心理学における複数の理論的な概念から、それらの共通性と差異を見出し、理論的な枠組をトップ・ダウンで構成する (I 基本枠組の構成)。それと並行して、これまでの研究で見出されている意味の内容の類型について、改めて自由記述データやインタビューの語りの具体例から見直し、ボトム・アップで分類する (II 基本要素の構成)。そして、これらの基本要素と基本枠組とを往

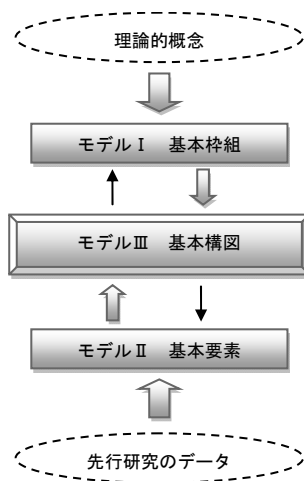


図1 モデル構成のプロセス

還的に検討するプロセスを経て、これらに関係づけるような構図を構成する(Ⅲ基本構図の構成)。また、最後に人生の意味についての実際の記述や語りをこのモデルを用いて検討し、本モデルの適用可能性を探る。このような一種の「質的メタ分析(qualitative meta-analysis)」と呼ぶべき試みによって、これまでの研究や理論モデルの位置づけをより明確にするとともに、人生の意味の概念を改めて定義し、今後の研究においても有用となるモデルと方法論を提示することを目指す。

I 基本枠組の構成

まず、これまでの哲学や人間学および心理学において、人生の意味およびその周辺の概念がいかに理論化されてきたかを概観し、それらの知見と問題点を踏まえたうえで、基本枠組を構成する。

1 諸概念の整理

(1) 意味

人生の意味への問いは、「『机』の意味とは何か」

「『よい』の意味とは何か」「『意味』の意味とは何か」というような問いとは異なり、単に「人生」という語の用法や説明を求めているのではなく「人生というものそれ自体の意味」を問うている(Eagleton, 2007; Nielsen, 2000b)。しかし、人生の意味はさまざまな状況において問われるため、「人生」「意味」「人生の意味」といった語が別様に理解されてしまうという困難が付きまとう(村山, 2005)。

現代哲学においては、そもそもこの問い自体に哲学的・言語学的な意味があるのか、それとも全く無意味なのか、という根本的立場から対立が見られ、「現代哲学をおおむね特徴づける言語学的志向にあつては、人生の目的は何かという問いかけは従来にくらべてラディカルに斥けられることが多い」(Singer, 1995/1992, p.40)。問いそれ自体の意味に対する批判的な見方としては、たとえば「意味に満ちていること(to be meaningful)」とは象徴であり、人生は象徴となりえないがゆえに人生は意味あるものになりうる類のものではないという批判や、人生の意味についての言明は命題を表現していないという論理実証主義からの批判などがある(see Ellin, 1995, chap.10)。しかしながら、「意味」という語は、必ずしも言語学的な文脈でのみ使用されるわけではなく(Hepburn, 2000)、メッツ(Metz, 2002)によれば、現代の理論家の多くは、人

表1 哲学における人生の意味に関する概念

| 概念 | 著者 |
|--|---|
| 形而上学的 (metaphysical) / 宗教的 (religious), 現世的 (secular) / 人間的 (humanistic), 悲観的 (pessimistic) / 虚無的 (nihilistic) | Sanders & Cheney (1980) |
| 究極的 (ultimate) 意味, 地上的 (terrestrial) 意味 | Edwards (1981) |
| 発見 (discover) されるもの, 創造 (create) されるもの | Singer (1995/1992) |
| 内発的 (intrinsic), 外発的 (extrinsic) | Wiggins (1988) |
| 前意味, 超意味, 脱意味 | 山田 (1999) |
| 身体的 (physical) 次元, 道德的 (moral) 次元, 審美的 (aesthetic) 次元, 宗教的 (religious) 次元 | Hick (2000) |
| 内発的 (intrinsic), 派生的 (derivative) | Joske (2000) |
| 客観的 (objective) 意味, 主観的 (subjective) 意味 | Klemke (2000a); Smith (2000); Markus (2003) |
| 個人的 (individual), 宇宙的 (cosmic) | Quinn (2000a) |
| 価値論的 (axiological) 意味, 目的論的 (teleological) 意味, 完全な (complete) 意味 | Quinn (2000b) |
| 内側から (from within) の意味, 外側から (from without) の意味 | Taylor (2000); 青木 (2004) |
| 人生の意味 (meaning of life), ある人生の意味 (meaning of a life) | Adams (2002) |
| 超自然主義 (supernaturalism), 自然主義 (naturalism) | Metz (2001, 2002, 2007) |
| 一貫性 (coherence), 目的 (purpose), 価値 (value) | Markus (2003) |
| 目的 (purpose), 価値 (value), 理解しやすさ (intelligibility) / 一貫性 (coherence) | Thomson (2003) |
| 回答可能な (answerable), 言語に絶した (ineffable) | Cooper (2005) |
| 一時的 (temporal) 意味, 永続的 (enduring) 意味 | Grünberg (2005) |
| 主観的 (subjective), 間主観的 (intersubjective) | Levy (2005) |
| 目的論, 解釈学, 経験論 | 村山 (2005) |
| 人類の生それ自体の意味 (meaning of human life as such), 個人の人生の意味 (meaning of an individual's life) | Metz (2007) |

生の意味についての記述は、その真偽はともかくとして、何らかの命題（とくに人が追い求めるべき目的に関連したもの）を表現していると考えられる傾向にあるという。

「意味」という語自体の意味については、たとえば分析哲学者のホスパーズ (Hospers, 1967) が、「指示 (indicator)」「原因 (cause)」「結果 (effect)」「意図 (intention)」「説明 (explanation)」「目的 (purpose)」「含意 (implication)」「意義 (significance)」の8つに分類しているが、人生の意味の概念には、少なくとも「意義 (あるいは価値)」と「目的」が含まれていると考える哲学者は多い (e.g., Singer, 1995/1992; Joske, 2000; Quinn, 2000b; 村山, 2005)。そしてそのような目的や価値を踏まえ、他の多くの哲学者も、表1に示すようにいくつかの対極的な概念から人生の意味を捉えている。

一方、心理学においても、人生の意味についての多くの異なる見解が見られる。たとえばフランクルにと

って、基本的には人生の意味は創りだされるものではなく、発見されるものである (Frankl, 1979/1969)。しかし、同じく実存主義的な心理学者のマッディ (Maddi, 1998) は、意味は意思決定によって創造されるものであると述べている。

だが、哲学と同様に心理学の領域でも、人生の意味という言葉は、2つもしくは3つの対極的な意味を持つものと捉えられることが多いといえる。表2に心理学で提示されてきた主な概念を示す。

以上のような人生の意味に関する哲学および心理学の諸概念を概観すると、我々の存在の根源的・絶対的な根拠や理由に言及する「究極的・宇宙的・客観的・超自然的な意味」と、日常的な文脈の中での重要性に関する「地上的・世俗的・主観的・自然主義的な意味」との対立で人生の意味を捉える立場が多いことがわかる²⁾。この対立において、前者は「与えられるもの・発見されるもの」、後者は「創造するもの」とされている (e.g., Baird, 1985; Frankl, 1963; Wong, 1998b)。

表2 心理学における人生の意味に関する概念

| 概念 | 著者 |
|--|--|
| 宇宙的 (cosmic) 意味, 世俗的 (worldly) / 個人的 (personal) 意味 | Frankl (1963) |
| 究極的 (ultimate) 意味, 地上的 (terrestrial) 意味 | Yalom (1980) |
| 発見 (discover) されるもの, 創造 (create) されるもの | Baird (1985), Kenyon (2000) |
| 目的 (purpose), 効力感と統制感 (efficacy and control), 価値と正当化 (value and justification), 自己価値感 (self-worth) | Baumeister (1991) |
| 客観的 (objective), 相対的 (relative), 主観的 (subjective), 説明的 (appellative) | Längle (1992) |
| 人生の意味 (meaning of life), 生活の意味 (meaning in life) | Ebersole & DeVore (1995) |
| 究極的 (ultimate) 意味, 暫定的 (provisional) 意味 | Farran & Kuhn (1998) |
| 自己称賛 (self-glorification), 自己超越 (self-transcendence) | Hermans (1998) |
| 重要性 (importance), 価値適合的 (value-congruency), 自己アイデンティティ (self-identity), 没頭 (absorption), 楽しみ (enjoyment) | Little (1998) |
| 関係的 (relational), 個人的 (personal) | Wong (1998a) |
| 究極的 (ultimate) 意味, 特定の (specific) 意味 | Wong (1998b) |
| 解釈的 (interpretive), 志向的 (directional) | Dittmann-Kohli & Westerhof (2000) |
| 状況的 (situational) 意味, 大域的 (global) 意味 | Folkman & Moskowitz (2000); Park (2005) |
| 暗黙の (implicit) あるいは明確な (definitional) 意味, 実存的意味 (existential meaning) あるいは意味深さ (meaningfulness) | Bar-Tur, Savaya, & Prager (2001) |
| 出来事 (events), 経験 (experience), 存在 (existence) | Bering (2003) |
| 仕事 (work) / 業績 (achievement), 親交 (intimacy) / 関係性 (relationships), スピリチュアリティ, 自己超越 / ジェネラティヴィティ | Emmons (2003) |
| 目的, 価値, 根拠 | 亀田 (2003) |
| 所属すること (belonging), すること (doing), 自己と世界を理解すること (understanding self and world) | King (2004) |
| 準宗教的 (semireligious), 宗教的 (religious), 人間的 (humanistic) | Laverty, Pringle-Nelson, Kelly, Miket, & Janzen (2005) |
| 究極的 (ultimate) 意味, 個人的 (personal) 意味, 暫定的 (provisional) 意味 | Auhagen & Holub (2006) |
| 現象学的次元 (phenomenological dimension), 行動的次元 (behavioral dimension), 存在論的次元 (ontological dimension) | Leontiev (2007b) |
| 高次元の (high-order) 意味, 低次元の (low-order) 意味 | Orbach (2007) |
| 決定論的 (determinate) な世界の意味, 非決定論的 (indeterminate) な世界の意味, 決定論的・非決定論的な世界を合わせた意味 | Peterson (2007) |

モデルを構成する際には、まずこのような「創造か発見か」という点を明確に区別する視点が必要である。

(2) 無意味

人生の無意味さについては、実存主義の流れにおいて(逆説的ではあるが)真剣に取り上げられていたと言えるが(e.g., Camus, 1969/1942; Nietzsche, 1993/1906; Sartre, 2008/1943), 意味があるかないかという立場の違いを問わず、有意味になりうる条件を前提し、それなしには人生は無意味となるという議論は、実存主義以外でも多くみられる。人生の無意味さについては、

超自然的な存在(神や魂)がなければ人生が無意味であるとする立場(e.g., Camus, 1969/1942; Craig, 2000; Morris, 1992), 何らかの普遍的な道徳が人生の意味には不可欠と考える立場(e.g., Cottingham, 2003; Murphy, 1982; Tännsjö, 1988), 人間を外部から眺めることによって、人生は取るに足りないものとする立場(cf. Nagel, 2009/1986), 目的を達成できなければ無益(futile)と捉える立場(cf. Trisel, 2002)などが挙げられる。

(3) 前意味・超意味・脱意味

一方、人生の意味をいまだ問わない立場、あるいはもはや問わない立場も考えられる。山田（1999）は、これらについて、いまだ意味を問わない意味以前の状態として「前意味」を、もはや意味を問わない状態として「超意味」と「脱意味」を挙げ、人間学的な考察を加えている。

山田に従えば、前意味とは、いまだ自我意識が芽生えていない幼児の状態である「意味以前」や、意識的に意味や生きがいを問わずとも、そこにすでに無意識的に含まれているはずの意味である「前-意味」の状態であり、たとえば主客の分離がない「純粋経験」（西田、1950）がそれにあたる。それに対して、超意味は、フランクルの概念であり、人間の識関内の意味を超え「それらの意味の全体を成立せしめている意味の意味、識関外の意味」（山田、1999、p.290）である。脱意味は、ハシディズムや禅に見られるように「意味」と「無意味」の2つのあり方を脱した「なぜという問のない (ohne Warum) 生き方」（Eckhart, 1990）のことを指す。このような意味を問わない立場についても人生観の問題として取り上げていくことは、今後の心理学においても重要な視点となるであろう。

(4) 意味の深さ（レベル）

次に、主に心理学において概念化されてきた人生の意味の深さ（レベル）について検討する。意味の深さについての先行研究としては、リーカーとウォン（1988）の意味の4つのレベルの概念や、デフォォーグラー・エバーソールとエバーソール（DeVogler-Ebersole & Ebersole, 1985）の意味の深さの評定基準を用いた研究などが挙げられる。リーカーとウォン（1988）は、フランクル（1963）の実存分析の理論や、ロカーチ（Rokeach, 1973）の価値研究をもとに、意味の深さを自己超越の程度から捉え、快樂主義的な喜びと快適さを伴って自己没入している「レベル1」、自分自身の潜在的な可能性の実現に時間と力を注ぐ「レベル2」、自分への関心を超え、他者への奉仕やより大きな社会的・政治的なものへ貢献するという「レベル3」、個人を超越したものを享受し、宇宙的な意味や究極的な目的を包含する「レベル4」という4つのレベルから意味の深さを概念化している。しかし、実際の調査で

はこのように単線的には捉えきれないことも指摘されている（O'Connor & Chamberlain, 1996）。

また、デフォォーグラー・エバーソールとエバーソール（1985）は、自由記述の意味の深さを評定する基準を設け、より個性的・具体的で、経験に基づいた複雑な記述を深い意味と評定することを提案している。この基準を用いて浦田（2007a）が看護学生を対象に実施した調査では、意味が深いと判定された者ほど実存的空虚感が低いことなどを見出している。しかし、この意味の深さの観点も、意味の深さの定義がいまだ明確ではなく、それゆえ意味を深いと判定する基準が曖昧であることや、判定は研究者の価値観や社会文化的背景に左右されてしまう可能性があることが問題点として残っており（Ebersole & Kobayakawa, 1989; Jenerson-Madden, Ebersole, & Romero, 1992）、より明確で理論的整合性のある意味の深さの定義が求められる。

(5) 用語について

これまでの人生の意味の心理学的研究においては、「meaning of life」「meaning in life」「life meaning」「personal meaning」「existential meaning」などのさまざまな用語が、それぞれが使用される文脈に微妙な差異が認められるものの、あまり自覚的に区別されることもなく用いられてきた。また、訳語も「人生の意味」「人生の意義」「人生の目的」「生きる意味」および「生きがい」³⁾などが、ほぼ同義のものとして用いられることが多い。その上、フランクル理論に関する実証的研究においては、「purpose in life」という用語が慣習的に使われており、これも上記の用語群とあまり区別されていない。

このような現状を踏まえ、ここではフランクル（1963）やエバーソールとデヴォア（Ebersole & DeVore, 1995）の論などを参考に、「meaning of life」は、人類や世界全体の存在理由に関する概念であり、「人生全体・人生そのものの意味」を表すものとして「人生の意味」と訳し、「meaning in life」は、個人的・日常的な価値に関する概念であり、「生活の中で見出される意味」を表すものとして「生活の意味」と訳し、両者を区別することとする。今後、他の用語とその訳語についても、さらなる整理・統一が必要であるが、本論では、後に述べるように、「生活の意味」

表3 人生の意味の概念整理

| 概念 | 概要 |
|-------------------------|--|
| 生活の意味 (meaning in life) | 地上的・具体的で、個人によって創造される意味。 |
| 人生の意味 (meaning of life) | 人生全体の意味。生活の意味を包含し、究極的・宇宙的な次元（与えられるもの、発見されるもの）までを含む。 |
| 無意味 (no meaning) | 日常生活あるいは、人生全体に意味はないとする立場。 |
| 前意味 (pre meaning) | 意味や生きがいの問題になる以前のあり方。意識ないし自我が未発達なために意味を問わない「意味以前」と、意味を問うことはなくともそこにすでに無意識的に意味が含まれている「前-意味」が含まれる。 |
| 超意味 (super meaning) | 意味全体を成立させている意味の意味、識閥外の意味を信じる立場。 |
| 脱意味 (trans meaning) | 意味と無意味という2つのあり方を脱して、「何故なし」に生きるあり方。 |

は「人生の意味」の概念に包含されるものであると考
え、どちらもまとめた場合は「人生の意味」と呼ぶこ
とにする。なお、心理学の領域では個人的・主観的な
価値が問題にされることが多いため、「meaning of
life」よりも「meaning in life」のほうがより一般的に
使用されている。

2 基本枠組の構成——入れ子モデルの採用

ここまで見てきたような理論的な背景や用語的な問
題を踏まえ、基本枠組の構成を試みる。ここでは理論
的な枠組に関して、まず哲学と心理学における概念的
な論考から、人生の意味の概念的な意味についての記
述があるものを抜き出し (cf. 表1, 2)、それぞれが意
味するところの類似性と差異を検討し整理した (表3)。

先述した通り、哲学・心理学ともに人生の意味の概
念にはいくつかの対極的な立場が存在することが繰り返
し指摘されている。これらの人生の意味についての
立場では、それらの文脈の含む範囲が異なっていると
いえる。たとえば地上的・具体的な意味を考える立場
において、その立場が含む文脈は、個人の内面やその
周囲の身近な人々との関係などであり、パーソナルで
ミクロな次元であるといえる。それに対して宇宙的・
究極的な意味を考える立場で問われるのは、人生一般
についての問いや世界の存在理由など、地上的・具体
的な意味を含みこんだ、よりマクロな次元である。

このような人生の意味の概念を包括的に捉えるモデ
ルとして、ここではやまだ (1988) の心理的場所^{トポス}の概
念、および西田幾多郎の場所論を踏まえた上田 (1999,
2007a, 2007b) の「二重世界内存在」の概念を基にし

て、「入れ子モデル」を採用することにする。

やまだ (1988) によれば、心理的場所^{トポス}とは、物理的
な空間そのものではなく、自分の居場所としての「囲
われた場所」であり、「比較的恒常的な個人の内部の
意味体系」(やまだ, 1988, p.140) である。またこの
ような「意味体系 (意味システム)」としての心理的
場所^{トポス}は、幾重もの「入れ子」のかたちをした多重の
場所^{トポス}であるとされる。たとえば、やまだと山田
(2006) は、人生を意味づける (経験を組織化する)
行為としてのライフストーリーについて、それを入れ
子構造の心理的場所^{トポス}として捉え、パーソナルな場所か
ら身近な場所へ、そして周辺の場所から社会・文化シ
ステムといったマクロな場所^{トポス}まで広がるものとしてモ
デル化している (「ライフストーリーの樹」モデル)。

人が自らの人生の意味を探求し理解しようとするこ
と、すなわち自らの様々な人生経験をむすび合わせて
組織化しようとするを、文字通り人生を意味づける
行為の一つとして捉えるならば、人生の意味の概念
も心理的場所^{トポス}の観点からモデル化するであろう。そ
うであるならば、人生の意味は、個人的・日常的な文
脈における意味から普遍的・大域的な文脈における意
味までを包含する多重の入れ子として捉えることがで
きる。

さらに、このような「囲われた場所」としての入れ
子の内部に収まらないような前意味・超意味・脱意味
といった立場を捉えるためには、やまだと同じく「場
所」の概念から自己や世界の構造を考察する上田
(1999, 2007a, 2007b; 上田・柳田, 1992) の「二重世
界内存在」の概念が有用である⁴⁾。上田 (1999) は、
「世界内存在としての我々の世界は世界として元来二

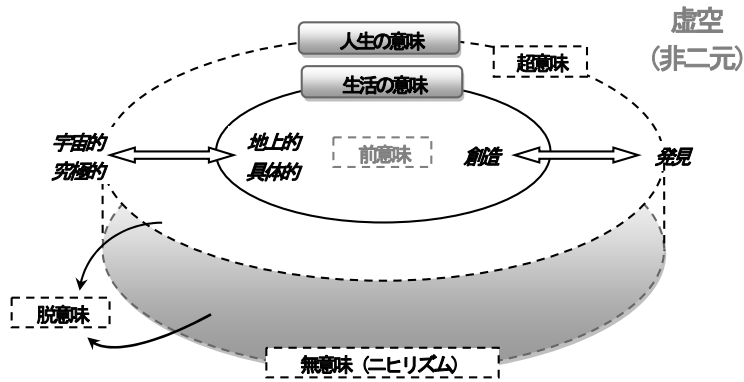


図2 人生の意味の入れ子モデル（I. 基本枠組み）

重になっている」とし、「～のために」を要としてまとめられた意味連関によって張り渡された重層的で包括的な意味空間としての世界の内に「於てある」我々は、「世界の内にいることによって、世界の内にありつつ同時に、世界が『於てある』限りない開け、見えざる虚空に『於てある』」（p.33）と捉えている⁵⁾。このような観点から、多重の意味空間としての人生の意味の入れ子が「於てある」場所は、上田の言う「『無』意味空間」「限りない開け」「無限の余白」「絶対無の場所」「見えざる虚空」であると捉えることができる。つまり、この人生の意味という心理的場所^{トポス}は、究極的には（あるいは前提として）意味・無意味、主観・客観を脱した脱意味という非二元的基底としての虚空に「於てある」と捉えるべきであろう。

これらを踏まえ、人生の意味のさまざまな立場を、「虚空」に「於てある」多重の文脈からなる心理的場所^{トポス}と考え、それぞれの立場の連関とそれが包含する文脈の大きさの観点から整理すると、図2のような入れ子の構造として捉えることができる。

図に示したように、地上的・具体的な次元で問われるのは、日々の生活の中で、何を生きる目的としているか、ということであり、それは「生活の意味（meaning in life）」であると言えよう。その問いがさらに広がり、パーソナルな次元からより普遍的・一般的な次元へと敷衍されるとき、それは生きること全体の意味、つまり「人生の意味（meaning of life）」とな

るであろう。

さらに、このモデルでは「超意味」「無意味」「脱意味」「前意味」を位置づけることも試みた。超意味は、「すべてに大きな意味がある」（Frankl, 1993/1946, p.112）という立場であり、捉え得ない「限界概念」（Frankl, 1957/1952, p.39）であることから、このモデルの外縁部に位置づけ、外縁を点線で示した。無意味は、「すべては意味を持たない」というニヒリズムの立場であるため、この人生の意味全体が反転したもの（虚空に映じられた人生の意味の影の部分）として捉えた。脱意味は、意味や無意味といった分別から脱落する立場であることから、この入れ子の外側に位置づけた。前意味は、これらの意味の前提であることから、この入れ子の中心に潜在的、背景的にあるものとした。これらはおおむね哲学的・人間学的思索や東西の黙想的な（contemplative）伝統から導出された概念であるが、人生観や死生観の問題として今後心理学でも取り上げていくべきものであろう。

II 基本要素の構成

次に「意味の源（sources of meaning）」として多くの実証的検討が見られる人生の意味の内容の類型に関する先行研究を概観した上で、それらを包括的にまと

表4 意味の類型についての先行研究一覧

| 分析対象 | 研究者 | 類型 ^{a)} | 地域 ^{b)} | 対象者 |
|------|---|--|------------------|-------------|
| | Lukas (1972/2004, 1981) | 「自己の暮らしの安楽」「自己実現」「家族」「本務」「人間関係」「興味」「体験」「信条への奉仕」「生活の困窮の克服」 | オーストラリア | 18～69歳の男女 |
| ○ | Battista & Almond (1973) | 「対人関係」「奉仕」「理解」「獲得」「表現」「倫理」 | アメリカ | 医学学生 |
| | Klinger (1977) | 「友人・コミュニケーション・理解」「親・兄弟姉妹」「宗教的信条・神との関係」「教育プロセス・大学の修了」他 | アメリカ | 大学生 |
| ○ | Yalom (1980) | 「利他主義」「大義への献身」「創造性」「快樂主義」「自己実現」「自己超越」 | アメリカ | — |
| ○ | DeVogler & Ebersole (1980) | 「理解」「関係」「奉仕」「信条」「表現」「獲得」「成長」「実存的-快樂主義的」 | アメリカ | 大学生 |
| ○ | DeVogler & Ebersole (1981) | 「関係」「信条」「成長」「ライフワーク」「健康」「奉仕」「理解」「獲得」 | アメリカ | 成人 |
| ○ | DeVogler & Ebersole (1983) | 「関係」「活動」「健康」「獲得」「学校」「外見」「信条」「成長」「奉仕」「喜び」 | アメリカ | 前期青年 |
| ○ | Ebersole & DePaola (1987) | 「関係」「奉仕」「信条」「獲得」「成長」「健康」「ライフワーク」「喜び」 | アメリカ | 高齢者 |
| | Baum & Stewart, Jr. (1990) | 「仕事」「恋愛と結婚」「子どもの誕生」「個人的な趣味」「事故/病気/死」「別離/離婚」「大きな買い物」 | アメリカ | 17～96歳の男女 |
| ○ | Fiske & Chiriboga (1991) | 「達成と仕事」「よい対人関係」「哲学的・宗教的目標」「社会的奉仕」「困難からの自由」「楽しみの追求」「個人的成長」 | アメリカ | 成人 |
| ○ | Taylor & Ebersole (1993) | 「関係」「活動」「信条」「成長」「獲得」「学校」「健康」 | アメリカ | 児童 |
| ○ | O'Connor & Chamberlain (1996) | 「人間関係」「創造性」「個人的成長」「宗教的もしくはスピリチュアル」「社会的もしくは政治的」「自然との関係」 | ニュージーランド | 40～50歳の成人 |
| ○ | Reker (1996) | 「自己没入」「個人主義」「集団主義」「自己超越」 | カナダ | 16～93歳の男女 |
| | Prager (1996) | 「個人的な関係性」「個人的欲求の満足」「価値や理想の維持」「個人的成長」 | オーストラリア | 18～91歳の男女 |
| ○ | Wong (1998a) | 「達成努力」「宗教」「関係」「満足」「公平-尊敬」「自信」「自己統合」「自己超越」「自己受容」 | カナダ | 18～60+歳の男女 |
| ○ | Debats (1999) | 「関係」「ライフワーク」「個人的ウェルビーイング」「自己実現」「奉仕」「信条」「物質主義」 | オランダ | 18～26歳の男女 |
| ○ | Prager, Savaya, & Bar-Tur (2000) | 「他者からの尊敬」「家族との親密さ」「社会集団への所属」「価値を基準にした生活」「スピリチュアル、心的/知的な追求」「心身の健康」「個人的な地位や成功」「自己充足」 | イスラエル | 21～78歳の男女 |
| | Showalter & Wagener (2000) | 「関係」「活動」「健康」「獲得」「学校」「外見」「信条」「成長」「奉仕」「喜び」 | アメリカ | キリスト教の青年 |
| ○ | Baessler (2001) | 「関係」「信条」「成長」「奉仕」「健康」「ライフワーク」「獲得」「喜び」「実存主義」 | ドイツ・ペルー | 青年 |
| ○ | Kim (2001) | 「達成」「経済的安定」「宗教」「受容と肯定」「関係」「自己超越」「よい性格」「自己鍛錬」「身体的健康」「親密な友人」 | 韓国 | 18～60+歳の男女 |
| ○ | Lin (2001) | 「自己発達」「達成」「受容と満足」「西洋宗教」「関係」「目的の追求」「家族」「自然や真理への接近」「よい待遇」「親密な関係」「普遍宗教」「自己超越」 | 中国 | 10代～60代の男女 |
| ○ | Pöhlmann, Gruss, & Joraschky (2006) | 「関係」「人生の仕事」「個人的ウェルビーイング」「自己実現」「奉仕」「信条」 | ドイツ | 神学部と科学系の大学生 |
| ○ | Schnell & Becker (2006) | 「自己超越」「自己実現」「秩序」「ウェルビーイングと共同性」 | ドイツ | 19～68歳の男女 |
| | Auhagen & Holub (2006) | 「個人的関係」「積極的な社会的行動」「活動」「獲得」「目標」「個人的成長」「ウェルビーイング」「人生それ自体」「進化」「超越」 | ドイツ | 18～69歳の男女 |
| | Fegg, Kramer, Bausewein, & Borasio (2007) | 「利他主義」「動物/自然」「家族」「経済的安定」「友人/知人」「健康」「快樂主義」「家庭/庭園」「余暇時間」他 | ドイツ | 16～70+歳の男女 |
| ○ | 浦田 (2007a) | 「関係」「奉仕」「獲得」「成長」「ライフワーク」「喜び」「存在」 | 日本 | 大学生・看護学生 |

^{a)}質的手法による分類と量的(因子分析的)手法による分類がある。

^{b)}地域名が明記されていない文献については、研究者の所属機関の所在地を記載した。

めた分類を行い、基本要素を構成する。

1 意味の類型についての心理学的研究

表4に示すように、意味内容の類型に関して、自由記述や尺度を用いた質問紙や面接によってさまざまな類型が見いだされている⁶⁾。

しかし、このようなカテゴリーカルな研究では、カテゴリー間の質的な違いはあまり問題にされておらず、それぞれの類型がどの程度見られたか、という比較に終始したものが多。この問題点に関して、後述するペールマンら (Pöhlmann et al., 2006) は、意味の源の結びつきを見るために、対象者に意味の源を列挙させた上でそれらを文章化させ、それをもとに意味内容をネットワーク図にして個人的意味のシステムを捉える方法を提唱している。今後、このような意味システム・アプローチは、意味の要素のつながりとその質的な多様性を検討する際の有効なアプローチとなるであろう。モデル構成の際は、このようなアプローチを内包するような枠組が求められる。

2 基本要素の構成——意味の類型の分析

表4に示したような研究を踏まえ、基本要素を構成する。意味内容の類型についての多くの先行研究では、意味内容の分類名(「関係」「成長」「喜び」など)とともに、それぞれの研究で得られた具体的な語りの事例や自由記述内容などが提示されている。ここでは、可能な限りローデータに近いものからボトム・アップで基本要素を構成することを意図し、これらの具体例を用いて意味内容を分析することを試みる。これらの研究における方法論は「もっとも重要な人生の意味」についての自由記述によるものが多く (e.g., Debats, 1999; DeVogler & Ebersole, 1980, 1981; Showalter & Wagener, 2000; 浦田, 2007a)、その他、同様の質問によるインタビュー調査 (O'Connor & Chamberlain, 1996) や、「理想的に意味深い人生 (ideally meaningful life)」についての記述をもとにした分類 (Wong, 1998a) など、いくつかの観点からの研究があるが、いずれも類似の分類結果が得られていることから、それらをまとめて分析対象とした。分析対象として用い

た先行研究は、表4に示した先行研究のうち、具体的な語りや記述例あるいは説明があったもの(表中の「分析対象」の欄に○印を付したもの)である。

分析手続きとして、まず先行研究における意味内容についての記述を収集し、個々の記述をカードに変換する作業を行った。カード化に際し、先行研究者のカテゴリーの影響を減らすため、先行研究における分類名はカード上には記載せず、記述や語りの具体例や説明のみをもとにカードを作成し、それらをKJ法 (川喜田, 1967) を参考に分類した (表5)。

分類の結果、表5に示すように多様なカテゴリーが見出された。それらは、①健康や経済性、感情的な側面など、主に主観的ウェルビーイングに関連する内容、②自己の成長や目標達成、潜在的な可能性の実現など、自己実現に関連した内容、③身近な人 (家族や子供など) や恋人や友人との関係性など、他者との共同性に関する内容、④普遍的な道徳や正義を重視することや、社会的・政治的信条を持つこと、文化の継承や子孫の存続など、身近な他者を超え、より大きな文脈における価値を志向した内容、⑤自分を越えたもの (宗教やスピリチュアリティ) とのつながりを重視する内容の5つに大別された。ここでは、さらに基本的な人生の意味の類型として、①と②を合わせて「個人的 (personal) 意味」、③を「関係的 (relational) 意味」、④を「社会的/普遍的 (social/universal) 意味」、⑤を「宗教的/霊的 (religious/spiritual) 意味」と呼ぶことにする⁷⁾。

III 基本構図の構成

1 基本構図の構成

以上を踏まえ、基本枠組と基本要素を媒介する基本構図を構成する。その際、基本要素における意味の類型を基本枠組に単純に位置づけるのではなく、心理学における既存の関連モデル⁸⁾や、人生の意味の心理学的研究で見出されたさまざまな知見に立ち戻り、それらの知見を参照・比較しながら作業を進めた。

以下では、まず基本構図を提示し (図3)、その概要

表5 意味内容の分類(Ⅱ. 基本要素)

| 基本原理 | 価値の方向性 | 意味の要素 | 具体的内容 |
|---------|----------------------|---------------|-------------------------------|
| 個人的 | 主観的ウェルビーイング | 健康 | 心身の健康を維持すること |
| | | 外見 | 外見をよくすること |
| | | 獲得 | 物質的・金銭的なものを獲得し、所有すること |
| | | 快樂 | 快樂を追求し、楽しむこと |
| | | 幸福感 | 喜びや満足を感じることに |
| | | 体験 | さまざまなことを体験すること |
| | | 美の享受 | 美しいもの、芸術的なものを味わうこと |
| | | 自己受容 | 自分の限界を受け入れ、満足すること |
| | 自己実現 | 生そのもの | 生きていることそれ自体が意味である |
| | | 目標達成 | 目標を達成すべく、努力をすること |
| | | 責任性 | 自立して責任を持つこと |
| | | 成長 | 能力や技能を身につけて成長すること |
| | | 潜在性の実現 | 自分の潜在的な可能性を認識し、実現・達成すること |
| | | 創造性 | 何かを創造すること |
| | | ライフワーク | 仕事・学業に従事すること |
| | | 理解 | 見識を広く持ち、多くのことを理解すること |
| | | 関係的 | 他者との関係性 |
| 承認・尊敬 | 他者から認められ、尊敬されること | | |
| 友情 | 親しい友人との良好な関係を保つこと | | |
| 恋愛 | 恋愛関係における親密さを持つこと | | |
| 奉仕 | 他の社会的に困っている人などを助けること | | |
| 社会的／普遍的 | 集合的・普遍的な価値 | 道徳性 | 正義や道徳を重視し、実践すること |
| | | 真理の把握 | なんらかの真理を見つけること |
| | | 社会への貢献 | 社会的・政治的な信条を持つこと |
| | | 伝統の継承 | 文化の伝統を守り、価値あるものを維持していくこと |
| | | 自然との関係 | 人間が自然の一部であると認識し、つながりを持つこと |
| | | 進化・ジェネラティヴィティ | 遺伝子を残し、人類の存続、進化に貢献すること |
| 宗教的／靈的 | 自己超越 | 宗教的信仰 | 神を信じ、神とのつながりを持つこと |
| | | スピリチュアリティ | スピリチュアルなもの、より高次なものとのつながりを持つこと |

を説明した上で、モデル構成のために参照した理論や研究の知見を踏まえつつ、このモデルによって整理されることをまとめて示す。

基本構図の概要を以下に述べる。基本要素において、基本原理として「個人的意味」「関係の意味」「社会的／普遍の意味」「宗教的／靈的意味」を提示しているが、これらの基本原理は、その立場の文脈が含む範囲の大小の観点から、「個人的意味」<「関係の意味」<「社会的／普遍の意味」<「宗教的／靈的意味」と捉えることができる⁹⁾¹⁰⁾。このうち、「個人的意味」と「関係の意味」は、日常生活における具体的・地上的な意味であることから、基本枠組における「生活の意

味(meaning in life)」に含まれると考えられる。それに対し、「社会的／普遍の意味」と「宗教的／靈的意味」は、「生活の意味」を超え、大域的・宇宙的・究極の意味に向かう「人生の意味(meaning of life)」に含まれるものであるといえる。これらを位置づけた上で、それぞれの入れ子の領域に、基本要素で見出されている具体的な意味内容を配置した(「健康」「友情」「道徳性」「神」など)。

次に、既存の心理学的な理論や知見を本モデルに位置付けて捉えなおすならば、以下のような点が挙げられる。

①表4にも示しているように、発達段階や社会文化的

が低いこと (浦田, 2007a), より自己中心的でない意味の源を持つ者のほうが人生観の統合性が高いこと (Leontiev, 2007a), 宗教を持つことが人生の意味の感覚や幸福感とポジティブに関連すること (e.g., Ardel, 2003; Ellison & Levin, 1998; Steger & Frazier, 2005) などが示されている。また意味内容が多様であるほど適応的であることもいくつかの研究で示唆されている (熊野, 2007; Reker, 1994; 浦田, 2005)。

- ⑥生涯発達の検討において, 年齢が上がるにつれ人生の意味の感覚が強くなることは, 複数の研究で指摘されている (e.g., Meier & Edwards, 1974; Reker & Fry, 2003; Reker, Peacock, & Wong, 1987)¹¹⁾。また個人的意味のシステムは, 年齢が上がるにつれてより統合され確固たるものとなること (Dittmann-Kohli & Westerhof, 2000), 若者は新しい (主に物質的な) 目標を達成し, より意味のある未来を期待する強い欲求があるのに対し, 高齢者は宗教的な活動, 社会的な大義, 利他主義, 伝統や文化の維持, 文化的価値や理想の保護などにより大きな意味を引き出していること (Prager, 1998a, 1998b; Reker, Peacock, & Wong, 1987) などが示されている。さらに, 高齢者になると宇宙的な次元への気づきが増え, 自己に対するナルシスティックな見方が減少し, それに人生への満足感が伴うことを示唆する「老年超越 (gerotranscendence)」という概念 (Braam, Bramsen, van Tilburg, van der Ploeg, & Deeg, 2006; Tornstam, 1997) や, 人生の意味づけに関する個人の信 (faith) が普遍合理性へと至るというファーラー (Fowler, 1981) の発達理論などを踏まえると, 人生の意味の発達は, 意味の幅が, 意味システムとしての一貫性や統合性を保ちながら入れ子全体へと広がるプロセスとして捉えることができるであろう。

2 モデルによる仮説生成

やまだ (2002) は, モデルの機能の一つとして, 個々の事象を見る見方が変わり, 新たな仮説や実証を発展的に生み出して行く生成的な機能を挙げている。この機能を踏まえると, 本モデルにおいては次のような仮説や方法論も新たに生成することができるだろう。

- ①入れ子のある次元で有意義であっても, 必ずしもそれより外側の次元が有意義である必要はないと考えられる。たとえば, 宗教や規範が生きていく意味とならなくても, 主観的な喜びなどが生きていく意味となりうるであろう (e.g., 青木, 2004; Baier, 2000, p.128; Wong, 1998b, p.405)。
- ②しかし, ある次元の意味のみが極端に絶対化され, それが有意義あるいは無意味である場合, それより内側とそれより外側のすべての次元が無意味となりうる (e.g., さまざまな還元主義, カルト教団など)。
- ③無意味の立場と有意義の立場は, 互いに対立するものでありながら, 人生の中では, 意味の発見や創造と意味への懐疑が表裏一体として見られ (浦田, 2006), 無意味についても, 人生の意味に相対的に対応したさまざまなレベルの無意味 (e.g., 神の否定, 普遍的な秩序の否定, 主観的な喜びの否定等) があると考えられる¹²⁾。
- ④入れ子の全体, すなわち人生の意味の概念全体は, 包括的な「意味システム (意味体系・意味連関)」の構造として捉えることができるであろう。やまだの心理的場所^{トポス}の概念における「個人の内部の意味体系」(やまだ, 1988, p.140), 上田 (1999) の「意味連関がつながりつつ張り渡されている包括的な意味空間」(p.40) などの概念, およびそれに基づいて構成された本モデルは, 先述した人生の意味の心理学における意味システム・アプローチの理論的背景および手掛かりになると考えられる。
- ⑤「個人的意味」として, 主観的ウェルビーイングと自己実現が見出されたが, これらは個人の意味システムの統合性や一貫性によって異なる類型とのつながりが見出される可能性が考えられる。一般に, 自己実現は, 共同社会感情や愛などといった, なんらかの他の価値あるものとのつながりによって達成・実現されるものである (Maslow, 1987/1970)。そのため, 自己実現が単体で意味の源となることは少なく, 他者とのつながりや文化的な価値, 場合によっては宗教的な信条や実践などとの関係において自己実現が問題とされることが多いであろう (e.g., Hanley, 2002; Tamney, 1992)。この点からも, 単一の意味内容を取り上げて類型化するのではなく, 複数の意味内容とのつながりの中で個人の意味経験を取

り上げることが必要であると思われる。

⑥意味システムに着目する観点から意味の深さを捉えるとするれば、これまでの意味の深さについての理論モデルのように、単線的に意味の様相や発達を捉えるのではなく、その一貫性や複雑性および統合性の度合いや、どのような原理を取り入れているか、というような視点から意味の多様性や発達の變化を捉えることができると思われる（Pöhlmann et al., 2006）。すなわち、どの次元の意味がその個人にとって重要であり、その意味が他の次元の意味とどのようにつながってネットワークを形成しているか、ということを検討することによって、個人の意味システムの複雑性や一貫性や多様性を浮き彫りにすることができるであろう。

ここからは、本モデルから生成されたこれらの仮説を踏まえつつ、仮説⑥の意味システム・アプローチを採用し、実際の事例をもとに分析を試みることによって、このモデルの適用可能性を探る。

モデルの適用

意味システム・アプローチによる方法論を提案するペールマンら（2006）は、意味の源を結び合わせた文章の分析によって、それらの源のつながりを検討している。たとえば「スポーツをすることによって、仕事で要求されることに全力を傾けるためにリラックスし、再び元気を取り戻すことができる」という記述の場合、それを図に変換する際には「スポーツをすることによってリラックスし、再び元気を取り戻す」という部分は「ウェルビーイング」に、「仕事で要求されることに全力を傾ける」は「ライフタスク」と解釈され、2つが線で結ばれる。そしてこの図化によって、図内のネットワークにあるカテゴリーの数が「差異化（differentiation）」の度合いとして、カテゴリー間のコネクションの数が意味システムの「緊密さ（elaboration）」の度合いとして評価され、最後にこの図の「一貫性（coherence）」や「統合性（integration）」を5段階で評価する。このアプローチは、単に意味内容を並列的に記述するだけではなく、量的アプローチ

と質的アプローチを組み合わせ、個人的意味を力動的なネットワークとして捉えることを試みている点で、注目されるアプローチであるといえる。

本論では、このペールマンらの方法論を踏まえ、ネットワーク図による分析法と本論で構成されたモデルとを組み合わせた質的な分析を試みる。質的研究におけるサンプルの選択には様々な戦略が存在するが（see Flick, 2002/1995, chap.7）、ここでは、本モデルの主たる特徴である意味の深さや一貫性および統合性の関連を示すため、パットン（Patton, 1990）の目的志向的サンプリングの提案に従って、「決定的な（critical）」事例、すなわち研究されている事象やその意味の関連が劇的に（dramatically）明らかになるような事例を取り上げることにする。そのため、本論では社会的に大きな貢献をすることを通して一貫した「人生の意味」（本モデルの入れ子全体）を実現し、それを明示的に語りうると認められる著名人の事例（意味のレベルも一貫性も高い事例1）と、「生活の意味」（個人的意味および関係の意味）が述べられた例のうち、一貫性や統合性が異なる2事例（レベルも一貫性も高くない事例2、およびレベルは高くないが一貫性は高い事例3）を取り上げ、それらの特徴や差異について、本モデルを用いて説明を試みることによってモデルの適用性を検討する。

1 人生の意味が述べられた事例

アメリカの大衆雑誌「LIFE」の編集者のフレンドら（Friend & Editors of Life, 1991）は、世界中の各界の著名人に対して「人生の意味は何ですか？」と問い、それらを一冊の本にまとめている。ここでは、その中からとりわけ幅広い意味内容が述べられた例として、北アイルランド問題の平和的解決に取り組み、1976年にノーベル平和賞を受賞したマイレッド・マグワイア（Mairead Maguire）の回答を取り上げる。文中の傍線および傍線中の括弧内の補足は筆者によるものであり、表5に見られるような意味の要素が述べられた部分として取り上げたことを示している。

【事例1】

私には、肉体と魂（スピリチュアリティ）があ

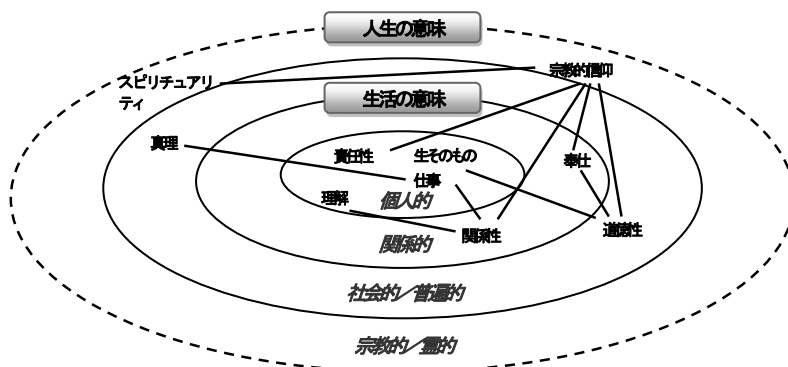


図4 人生の意味が述べられた事例

ります。私は、ある時には身体的な命が奪われ、肉体が死ぬということを知っています。しかし、私の魂（スピリチュアリティ）は、神によって創造されたものであり、死ぬことはないのです。神の恩寵の力と神秘によって、神の愛の精神はどんな人の魂の中にも生きています（スピリチュアリティ・宗教的信仰）。私たちは神から愛されており、私たちは神を愛し（宗教的信仰）、どんな人の中にも神の精神を見出し（スピリチュアリティ）、他者を愛し（関係性）、奉仕するため（奉仕）に創造されているのです。

生きることにともなうて与えられるたくさんの神からの贈り物（gift）（宗教的信仰）があります。しかしその中でも、自由意志（責任性）と愛（関係性）は、ひととき優れたものです。自由意志には選択と責任性がともないます。私たちは日常的に非常に重要な選択をしていかなければなりません。...

個人的には、私は生きることを選択します。私は自分の生——すべての人の生——は、聖なる尊いものである（生そのもの）ことを知っています。このことは、私は他の人を殺してはならず、個人的、社会的な暴力を許してはならない（道徳性）ということの意味します。しかし殺すことを拒絶するだけでは十分ではありません。…積極的な非暴力を通じて、私たちは公平さのため、とりわけ、苦しみや貧困のため（道徳性）に働く（奉仕）ことができます。真実（真理）や愛（関係性）を通じて、私たちは自分自身や世界を変え（仕事）、私たちは愛し愛されるため（関係性）に生まれてきたことを深く理解する（理解）ことが

できるのです。

(Friend et al., 1991, p.177, 翻訳は筆者による)

この事例をモデルにおいてネットワークとして図化すると、図4のような解釈が可能であると考えられる。

図においては、ペールマンらの方法に従って、意味の要素同士の関係への言及がある部分は線で結んでいる。ペールマンらの基準によって意味システムの構造を評定すれば以下ようになる。同じ意味の源が複数述べられているものはまとめて1つとして換算した。

- ①意味の源の総数
(accessibility) : 10
- ②ネットワーク内にある意味の源の数
(differentiation) : 10
- ③ネットワークのつながりの数
(elaboration) : 10

このマグワイアの事例では、キリスト教の信仰によって与えられる人生の意味や価値が中心的に述べられている。図に示したように、個人的意味の次元から宗教的/霊的な次元まで、「人生の意味（meaning of life）」全体に亘る幅広い領域の意味内容が見られる。そこでは、まず神への愛や信仰などが最も大きな意味として強調され、それに続いてそれらの宗教的/霊的な意味が保証し包含するような道徳性や他者への愛、奉仕や責任性などの重要性が述べられている。ネットワークのつながり方を見ても、宗教的信仰からもっとも多くのつながりが出ており、それぞれの次元へとつな

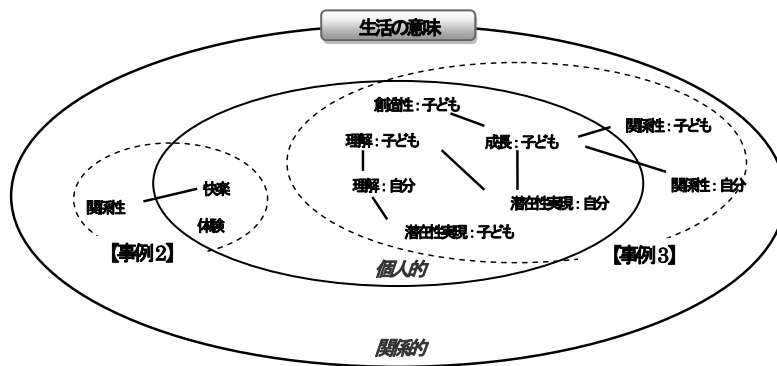


図5 生活の意味が述べられた事例

がっていることから、人生全体に意味を与える宗教的な信仰が、その内部の意味の要素と緊密に結びついており、「宗教的／霊的意味」の大きな文脈が「社会的／普遍の意味」や「関係の意味」および「個人的意味」を入れ子状に包含していることがうかがえる。ベールマンらの基準によっても、すべての意味が緊密につながり合っており、意味システムとしての一貫性や統合性も高いといえるであろう (cf. 仮説⑥)。

2 生活の意味が述べられた事例

続いて挙げる例は、筆者の自由記述による調査で見られた日本の看護学生の事例 (事例2)、およびデフォーグラー・エバーソールとエバーソール (1985) で最も意味が深いと判定された事例 (事例3) である。それぞれの自由記述の回答は以下の通り。括弧内および傍線は事例1と同様であるが、事例3のコロン (:) の後は、意味内容の主体を表している。

【事例2】

楽しむため (快楽)。自分の時間の資源を自分のために使う (体験)。たとえそれが他人のための行為 (関係性) であってもそれで自分の気分がよくなるため (快楽) に。何となく気分がよい時に人に優しくする。そうするとその人にとって自分はいい人になる。何かと都合がよくなる。自分のために生活できる (体験) ほど意味があると思う。

(20歳, 女性)

【事例3】

私の人生での最大の意味は、子どもたち (関係性: 自分) が自分の人生で優れた選択をして、思いやり (関係性: 子ども) があり 創造力 (創造性: 子ども) のある大人になる (成長: 子ども) ことができるように、適切な知恵 (価値, 態度や信念) を身につけさせる (成長: 子ども) ことです。私にとって、このことをするための一つの方法は、自分の潜在能力を認識し、その実現のために懸命に努力すること (潜在性の実現: 自分)、すなわち子どもたちにも 自分自身を知らせ (理解: 子ども)、彼らの人間としての自分の可能性を実現 (潜在性の実現: 子ども) させるために 私自身を十分によく知る (理解: 自分) ことです。(年齢不明, 女性)

(De Vogler-Ebersole & Ebersole, 1985, p.308, 翻訳は筆者による)

これらの事例ではいずれも「生活の意味」の次元のみに言及があることから、入れ子の「生活の意味」の領域のみを取り出して図5に示す。それぞれの意味システムの構造を評価すると以下ようになる。

【事例2】

- ① 意味の源の総数 (accessibility) : 3
- ② ネットワーク内にある意味の源の数

(differentiation) : 2

③ネットワークのつながりの数

(elaboration) : 1

【事例3】(子どもの視点と自分の視点の意味の源を分けて数えている)

①意味の源の総数

(accessibility) : 8

②ネットワーク内にある意味の源の数

(differentiation) : 8

③ネットワークのつながりの数

(elaboration) : 7

2事例とも、「社会的／普遍的意味」や「宗教的／霊的意味」に関わる内容は出てきておらず、「生活の意味 (meaning in life)」の中での意味経験が述べられている。事例2では、自分自身の楽しみや体験など(「個人的意味」)が中心的に述べられており、他者との関係性(「関係の意味」)もそれらを満たすためのものとして挙げられている。一方事例3では、自分にとっての意味と子どもにとっての意味が緊密に結びつけられ、単なる自己実現(「個人的意味」)の次元のみならず、子どもの成長や自己実現をケアする視点(「関係の意味」)が重要なものとして相互に結びつけられつつ重層的に述べられている (cf. 仮説⑤)。

これらの事例は、リーカーとウォンの意味の深さに関する4つのレベルの概念では、レベル1と2あるいは3の一部に相当する内容しか述べられておらず、「あまりレベルが高くない(意味が浅い)」と判定されるであろう。実際、事例2は事例1と比べ、意味システムとしても一貫性や統合性は低いと判定されるであろう。また、オコナーとチェンバレン(1996)は、社会的なものや国際的なものに言及されない例では、記述や語りが短いものが多いと指摘している。しかし、事例3に見られるように、「個人的意味」や「関係の意味」の範囲内においても、差異化され一貫性のある緊密なネットワークは構築しうるとされる (cf. 仮説①, ⑥)。逆に、レベル4の意味内容が出てきた場合でも、その内部の意味システムに一貫性がなければ統合された深いレベルの意味とは言えないであろう。この点から、意味の深さという概念は単線的に捉えるのではなく、有機的な意味システムのあり方からも考えることが妥当であると言えよう。

3 まとめ

今回の事例の検討は試論であるが、意味の要素とそれらの結びつきを見るという意味システム・アプローチの観点によって、個人がいかに関人の意味を構築しているかということをより明確に把握することができると思われる (cf. 仮説④)。その際、本モデルのように意味の要素の次元も考慮し、人生の意味の立場を総合的に把握することによって、これまで内容が並列されるだけであった従来の研究の枠組を超え、より詳細に人生観の質的な多様性を問題にすることができるであろう。また、ペールマンらのように、要素の数やつながりの本数によって定量的な分析の材料とすることも可能である。

ただし、このような意味システムの構造を掘り上げるためには研究方法に工夫を要するであろう。ペールマンらは回答時間を区切って意味の要素の関連を具体的に記述させ、それらのランク付けを求めているが、質問紙による自由記述などの条件により制限がある場合、このように有効な回答が得られるようにすることが必要である。インタビューによって豊富な語りが得られる場合は分析方法も多様になりうるが、個人にとって重要な価値観や、その意味づけのあり方を詳細に聞くことができるようなインタビューを設定する必要があるであろう。

総合的考察

1 概念整理と定義

本研究では、人生の意味の心理学的研究の現状と課題を踏まえ、これまでの研究を総合的に整理・統合し、今後の新たな研究を生成するためのモデルを構成した。この試みによって、これまでの心理学的研究で問題とされてきた意味の構成要素・意味の幅・意味の深さ・意味の源などの概念 (Reker & Wong, 1988) をより包括的に捉えやすくなったといえる。

意味の構成要素(情動・認知・動機など)は、個人

的意味においては、意味の源とともに検討されるべきであろう。たとえば同じ「喜び」という情動的な意味の源を挙げていたとしても、それが人生の意味としての意味を持つ文脈はさまざまであり、どのような次元の意味との関係において認知的あるいは動機的に意味あるものとなっているのか、などについて検討する必要がある。

また、意味の源について、これまでの研究においては、それぞれの立場の質的な違いが区別されることなく検討されてきたが、このモデルによって、それらを次元的に整理して示すことができるであろう。

意味の幅は、意味の源の数（多様さ）を示す概念であるが、これに関しても単に意味の源の数の多少のみを問題とするのではなく、どの次元におけるどのような源が見られており、個人の主要な原理はどのようなものであるか、ということについても着目する必要があることが示唆される。

意味の深さ（レベル）については、従来のように、単に意味あるものとして経験される内容が変化するという観点から捉えるのではなく、意味が差異化・複雑化され、より緊密に結び合わされ、一貫性のあるものになるプロセスとして捉えることが有効であると考えられる。

以上のモデル化のプロセスを通し、ここでは、人生の意味の概念を改めて捉えなおし、以下のように定義する。

人生の意味とは、個人が主観的に感得し創造するような地上的・具体的な意味の次元から、他者との関係の中で生まれる意味の次元、さらには道徳や文化の継承などの社会的・普遍的な意味の次元から、宗教やスピリチュアリティなどの超自然的・宇宙的・究極的な意味の次元までを含む理論的概念である。そして、いずれかの次元に主要な価値を置き、(多くの場合)他の次元との関連において、それらの価値の実現や価値への従事を目的とするとき、人生は意味のあるものとして経験される。

2 臨床的・実践的なモデルとして

本モデルは、従来の理論的概念や研究知見を総合的

に捉えなおすことを主たる目的として構成されたものであるが、同時に臨床的・実践的観点からの有効性もあると思われる。このモデルは「人生の意味」という概念の意味するところが多様であり、個人が拠って立つ原理によって人生の意味の経験にも多様な次元がありうることを、したがって恣意的に意味を限定してその有無を論じるべきではないこと、などについて示唆を与えている。

人生の意味が問題とされる時、「意味」という語が使用される文脈は一般的にも学問的にも多様であるが、往々にして「意味」の意味は恣意的に限定され、その限定された観点から人生の意味の意味が定義されることが多かった (cf. 森岡, 2001)。さらには、その定義内での意味の有無が問題にされ、「人生の意味は～である」(原理主義的な宗教など)、あるいは「人生には意味などない」(実存主義、ニヒリズム、ポストモダンの相対主義的立場など)という主張がなされることとなる (cf. 仮説②, ③)。特定の人生の意味が固定化・絶対化される時、場合によってはそれ以外の人生の意味が否定され、カルト問題に見られるように、その特定の意味を実現しようとするために反社会的な行為が容認されてしまうこともあるだろう。また人生の意味がないという主張によって、むなしさ、意味喪失感、自殺念慮が助長されてしまうという例は枚挙に暇がない (cf. 藤井・宮台, 2003; Orbach, 2007; Tolstoy, 2000)。

しかし、本モデルで示したように、理論的な観点によっても実証的な研究知見によっても、実際には人生の意味は多次元的な概念であり、意味は多様な源から得られうるものであるため、単純にその有無を問題とすることはできないと考えるべきであろう。無意味さの感覚に陥るのは、個人が意味の多様性を見失い、ある特定の意味の文脈にとらわれてしまうことによる場合が多いと考えられる。そのような人生の意味の文脈の固定化、狭隘化の様相を明らかにすることは、今後臨床領域においても重要であると思われる。その際、「それはなぜ(何のため)ですか?」という問いを繰り返し問い、個人の世界観を評価するレオンチェフ (Leontiev, 2007a) の「究極の意味技法 (Ultimate Meanings Technique)」や、「意味管理理論 (meaning management theory)」(Wong, 2007a) に基づいた「意

味中心カウンセリング」(Wong, 1998b, 2007b)のような方法論なども応用しつつ、個人の意味システムのあり方を明らかにし、新たな意味発見への洞察を深めることが有効であろう。

3 今後の課題

本論で構成したモデルは、これまでの心理学的な知見と哲学や心理学の理論枠組とを統合することを目指したものである。このモデルに関して、今後検討が必要と考えられる点について以下に述べる。

第1に、人生の意味の心理学について、発達のな変化を詳細に見ていくことが必要である。このモデルの構成プロセスにおいても、世界観に関わると思われるさまざまな発達理論を参照したが、人生の意味の発達の变化についてはいまだ体系的な研究がなされておらず、幅広い視野からの検討が求められる。

第2に、このモデルの基本要素・基本枠組ともに、欧米の先行研究を基本にしており、ほぼ欧米の社会文化的文脈に依存したものになっている。これは、日本において体系的な研究が見られないことによるが、今後、日本における社会文化的な背景も考慮した検討が必要である (e.g., Steger, Kawabata, Shimai, & Otake, 2008)。

第3に、このモデルでは、基本的に意味をある程度構築しているものを対象としているため、問いの途上にある者の様相については、別の観点からの研究やモデル化が必要である (e.g., Denne & Thompson, 1991; 浦田, 2006, 2008)。

第4に、このモデルは、主に生の意味に焦点化したものであるが、死の意味も哲学的・心理学的に人生の意味の重要な側面であり (e.g., Becker, 1973; Greenberg, Koole, & Pyszczynski, 2004; 川島, 2005, 2008; 河野, 2002; Nielsen, 2000a; Tomer & Eliason, 2007; Wong, 2000, 2007b), 死と人生の意味の関連についてもさらなる検討や整理が必要であろう。

最後に、人生の意味は、「今ある、そしてあるべき世界や人生についての説明」としての世界観 (worldview) (Koltko-Rivera, 2004)に関わる問題であり、行動・認知・情動といった基本的な概念はもとより、アイデンティティの発達 (Erikson, 1963; Klaassen

& McDonald, 2002), 英知 (wisdom) (Fry, 1998), 信の発達 (Fowler, 1981), 道徳性 (Addad & Leslau, 1989; Carter, 1986), 個人的目標 (personal goals) あるいは究極的関心 (ultimate concerns) (Emmons, 1999; Emmons, Cheung, & Tehrani, 1998), スピリチュアリティ (Breitbart, 2002; Mascaró, Rosen, & Morey, 2004; Wong, 1998c)などを横断する概念であるため、今後、それらの領域を包括する横断的な検討が求められる。

注

- 1) やまだ (2002) は、Iを基本枠組、IIを基本構図、IIIを基本要素としているが、本論では論の進め方の都合上、IIとIIIを入れ替えている。
- 2) この2つの立場はしばしば混同され、たとえばフランク理論の中でも、この点が混同されているという批判がある (諸富, 1997; 滝沢, 1969)。
- 3) 「生きがい」という言葉には「いかにも日本語らしいあいまいさと、それゆえの余韻とふくらみ」(神谷, 1980, p.14)があるため、「人生の意味」よりもさらに意味的な広がりを持っているであろう。生きがいの定義については、近藤 (1997)の整理や鶴田 (1998)の語源的な考察、熊野 (2003, 2006)の実証的研究による類似概念との関連の検討などを参照されたい。
- 4) 上田は、自己存在の究極の意味に至るまでの意味連関に関して、「たとえば親としては自己にとって家族ないし家庭が意味の場であり、これはさらにいわゆる社会によってつつまれている。自己の置かれている場合は同時に自己存在の意味がそこで会得され確認され充実される意味連関でもある」(上田・柳田, 1992, p.83)と論じており、やまだと同じく、意味連関を多重の入れ子状のものとして捉えている。
- 5) もっともこの二重世界の構造は、表裏・明暗・正反といった単なる対称性ではなく、世界地平とその彼方という仕方に関わってくる「見えない二重性」である (上田, 1999)。
- 6) 哲学的な論考においても、表4に見られるような意味内容のいずれかを重視する論は多々見られる。たとえば、達成を意味あるものとする論 (James, 2005), 仕事が最も意味があるとする論 (Levy, 2005), 家族関係に意味があるとする論 (Velleman, 2005), 道徳が意味ある人生を導くという論 (Thomas, 2005), 創造性や卓越性、ウェルビーイングや人間関係などが特に意味深いとする論 (Audi, 2005)などである。
- 7) 実際には基本要素と基本枠組の構成は並行的に行っ

- ており、要素と枠組の相互の往還プロセスを経て、このような名称を最終的に採用するに至っている。
- 8) 参照した主な心理学のモデルとして、たとえばカーンとアントヌッチ (Kahn & Antonucci, 1980) のコンボイ・モデル、コールバーグ (Kohlberg, 1981) やギリガン (Gilligan, 1982) の道徳発達理論、Bronfenbrenner (1981) の生態学的発達モデル、やまだと山田 (2006) の「ライフストーリーの樹」モデル、シュウォーツ (Schwartz) による一連の価値研究における 10 の基本的価値のモデル (e.g., Schwartz, 1992, 2003), ウィルバー (Wilber, 2000) の「存在の大いなる入れ子 (the great nest of being)」などがあるが、これらの理論と人生の意味の問題との関連についての詳細は別稿で論じたい。
- 9) 「宗教的／霊的意味」を「社会的／普遍的意味」と区別し、さらにその外側に位置付けたのは、宗教的な意味は、身体レベルや道徳レベルの意味を包含 (include) し、その関係は、身体的意味 (本論での「個人的意味」) < 道徳的意味 (本論での「社会的／普遍的意味」) < 宗教的意味 (本論での「宗教的／霊的意味」) と捉えられるという議論 (Hick, 2000, pp.271-272) や、コールバーグの道徳発達における第 7 段階 (宗教的段階) についての理論 (Kohlberg, 1981; Carter, 1986), 宗教は人生全体に究極的で深淵な意味 (宇宙的なメタナラティブ, 究極的な価値や目的, 最大限の統合性) を与えるという基本的性質についての多く的一致した見解 (e.g., Davis, 1987; Emmons, 1999; Pargament & Park, 1995; Quin, 2000b; Runzo, 2000; Smart, 2000 ; 脇本, 1997 ; Wong, 1998c) などによる。
- 10) ここでは、さしあたり文脈が含む範囲の大小を問題にしており、必ずしも「社会的／普遍的意味」や「宗教的／霊的意味」がもっとも発達の「高次の段階」であると主張するものではない。ただし従来発達心理学における知見 (たとえばコールバーグやギリガンの道徳発達段階, フェアラーの信の発達段階など) を踏まえるならば、少なくとも「社会的／普遍的意味」までは発達プロセスとゆるやかな対応があると考えられる。
- 11) リフ (Ryff, 1989) の人生の目的についての尺度を用いた検討 (Ryff & Essex, 1992) や、中年期と老年期の人生の目的に関する研究のメタ分析 (Pinquart, 2002) では、年齢が上がるにつれて意味の感覚が低下すると指摘されているが、前者においては尺度で達成動機的側面が強調されていること、後者においては分析対象の年代が限定されていることなどが課題として残されており、さらなる生涯発達の検討が必要である。

- 12) 亀田 (2003) や浦田 (2008) による人生の意味への問いの内容の検討においてもさまざまなレベルの問いが見られている。

引用文献

- Adams, E. M. (2002). The meaning of life. *International Journal for Philosophy of Religion*, 51, 71-81.
- Addad, M., & Leslau, A. (1989). Moral judgment and meaning in life. *The International Forum for Logotherapy*, 12, 110-116.
- 青木克仁. (2004). 人生の意味と宇宙論的文脈. 安田女子大学紀要, 32, 51-60.
- Ardelt, M. (2003). Effects of religion and purpose in life on elders' subjective well-being and attitudes toward death. *Journal of Religious Gerontology*, 14, 55-77.
- Audi, R. (2005). Intrinsic value and a meaningful life. *Philosophical Papers*, 34, 331-355.
- Auhagen, A. E., & Holub, F. (2006). Ultimate, provisional, and personal meaning of life: Differences and common ground. *Psychological Reports*, 99, 131-146.
- Baessler, J. (2001). *The understanding of 'happiness' and 'meaning of life' in the concept of human nature of Germans and Peruvians: An empirical cross-cultural comparison*. Doctoral dissertation, Free University of Berlin. <http://www.diss.fu-berlin.de/2001/232/> (情報取得 2009/02/14)
- Baier, K. (2000). The meaning of life. In Klemke, E. D. (Ed.), *The meaning of life* (2nd ed., pp.101-132). New York: Oxford University Press.
- Baird, R. M. (1985). Meaning in life: Discovered or created? *Journal of Religion and Health*, 24, 117-124.
- Bar-Tur, L., Savaya, R., & Prager, E. (2001). Sources of meaning in life in young and old Israeli Jews and Arabs. *Journal of Aging Studies*, 15(3), 253-269.
- Battista, J., & Almond, R. (1973). The development of meaning in life. *Psychiatry*, 36, 409-427.
- Baum, S. K., & Stewart, R. B., Jr. (1990). Sources of meaning through the lifespan. *Psychological Reports*, 67, 3-14.
- Baumeister, R. F. (1991). *Meanings of life*. New York: Guilford.
- Becker, E. (1973). *The denial of death*. New York: The Free Press.
- Bering, J. M. (2003). Towards a cognitive theory of existential meaning. *New Ideas in Psychology*, 21, 101-120.
- Braam, A. W., Bramsen, I., Tilburg, T. G. v., Ploeg, H. M. v.d., & Deeg, D. J. H. (2006). Cosmic transcendence and framework of meaning in life: Patterns among older adults

- in the Netherlands. *Journal of Gerontology*, 61B, S121-S128.
- Breitbart, W. (2002). Spirituality and meaning in supportive care: Spirituality- and meaning-centered group psychotherapy interventions in advanced cancer. *Supportive Care in Cancer*, 10, 272-280.
- Bronfenbrenner, U. (1981). *The ecology of human development: Experiments by nature and design*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- カミュ, A. (1969). シーシュエボスの神話 (清水徹, 訳). 東京: 新潮社 (新潮文庫). (Camus, A. (1942). *Le mythe de sisyphé*. Paris: Gallimard.)
- Carter, R. E. (1986). The ground of meaning: Logotherapy, psychotherapy and Kohlberg's developmentalism. *The International Forum for Logotherapy*, 9, 116-124.
- Cooper, D. E. (2005). Life and meaning. *Ratio*, 18, 125-137.
- Cottingham, J. (2003). *On the meaning of life*. New York: Routledge.
- Craig, W. L. (2000). The absurdity of life without god. In Klemke, E. D. (Ed.), *The meaning of life* (2nd ed., pp.40-56). New York: Oxford University Press.
- Crandall, J. E., & Rasmussen, R. D. (1975). Purpose in life as related to specific values. *Journal of Clinical Psychology*, 31, 483-485.
- Crumbaugh, J. C., & Maholick, L. T. (1969). *Manual of instruction for the Purpose-in-Life-Test*. Munster, IN: Psychometric Affiliates.
- Davis, W. (1987). The meaning of life. *Metaphilosophy*, 18, 288-305.
- Debats, L. D. (1999). Sources of meaning: An investigation of significant commitments in life. *Journal of Humanistic Psychology*, 39, 30-57.
- Debats, L. D. (2000). An inquiry into existential meaning: Theoretical, clinical, and phenomenal perspectives. In Reker, G. T., & Chamberlain K. (Eds.), *Exploring existential meaning: Optimizing human development across the life span* (pp.93-106). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Denne, J. M., & Thompson, N. L. (1991). The experience of transition to meaning and purpose in life. *Journal of Phenomenological Psychology*, 22, 109-133.
- DeVogler, K. L., & Ebersole, P. (1980). Categorization of college student's meaning of life. *Psychological Reports*, 46, 387-390.
- DeVogler, K. L., & Ebersole, P. (1981). Adult's meaning in life. *Psychological Reports*, 49, 87-90.
- DeVogler, K. L., & Ebersole, P. (1983). Young adolescents' meaning in life. *Psychological Reports*, 52, 427-431.
- DeVogler-Ebersole, K., & Ebersole, P. (1985). Depth of meaning in life: Explicit rating criteria. *Psychological Reports*, 56, 303-310.
- Dittmann-Kohli, P. (1990). The construction of meaning in old age. *Aging and Society*, 10, 270-294.
- Dittmann-Kohli, P., & Westerhof, G. J. (2000). The personal meaning system in a life-span perspective. In Reker, G. T., & Chamberlain K. (Eds.), *Exploring existential meaning: Optimizing human development across the life span* (pp.107-122). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Durant, W. (2005). *On the meaning of life*. Texas: Prometheus Press.
- Eagleton, T. (2007). *The meaning of life: A very short introduction*. New York: Oxford University Press.
- Ebersole, P. (1993). Contributions to psychohistory: XXI. Analysis of Conrad's Lord Jim's life meaning. *Psychological Reports*, 72, 31-34.
- Ebersole, P. (1998). Types and depth of written life meanings. In Wong, P. T. P., & Fry, P. S. (Eds.), *The human quest for meaning: A handbook of psychological research and clinical applications* (pp.179-191). London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Ebersole, P., & DePaola, S. (1987). Meaning in life categories of later life couples. *Journal of Psychology*, 121, 185-191.
- Ebersole, P., & DeVore, G. (1995). Self-actualization, diversity, and meaning in life. *Journal of Social Behavior and Personality*, 10, 37-51.
- Ebersole, P., & Kobayakawa, S. (1989). Bias in meaning in life ratings. *Psychological Reports*, 65, 911-914.
- Ebersole, P., & Quiring, G. (1991). Meaning in life depth: The MILD. *Journal of Humanistic Psychology*, 31, 113-124.
- エックハルト, M. (1990). エックハルト説教集 (田島照久, 編訳). 東京: 岩波書店 (岩波文庫).
- Edwards, P. (1981). Why. In Klemke, E. D. (Ed.), *The meaning of life*. (1st ed., pp.227-240). New York: Oxford University Press.
- Ellin, J. (1995). *Morality and the meaning of life: An introduction to ethical theory*. Belmont, CA: Wadsworth Publishing.
- Ellison, C. G., & Levin, J. S. (1998). The religion-health connection: Evidence, theory, and future directions. *Health Education and Behavior*, 25, 700-720.
- Emmons, R. A. (1999). *The psychology of ultimate concerns*. New York: Guilford.
- Emmons, R. A. (2003). Personal goals, life meaning, and virtue: Wellsprings of a positive life. In Keyes, C., & Haidt, J. (Eds.), *Flourishing: Positive psychology and the well-lived life* (pp.105-128). Washington, DC: American

- Psychological Association.
- Emmons, R. A., Cheung, C., & Tehrani, K. (1998). Assessing spirituality through personal goals: Implications for research on religion and subjective well-being. *Social Indicators Research*, 45, 391-422.
- Emmons, R. A., Colby, P. M., & Kaiser, H. A. (1998). When losses lend to gains: Personal goals and the recovery of meaning. In Wong, P. T. P., & Fry, P. S. (Eds.), *The human quest for meaning: A handbook of psychological research and clinical applications* (pp.163-178). London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Erikson, E. H. (1963). *Childhood and society* (2nd ed.). New York: Norton.
- Farran, C. J., & Kuhn, D. R. (1998). Finding meaning through caring for person with Alzheimer's disease: Assessment and intervention. In Wong, P. T. P., & Fry, P. S. (Eds.), *The human quest for meaning: A handbook of psychological research and clinical applications* (pp.335-358). London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Fegg, M. J., Kramer, M., Bausewein, C., & Borasio, G. D. (2007). Meaning in life in the Federal Republic of Germany: Results of a representative survey with the Schedule for Meaning in Life Evaluation (SMiLE). *Health and Quality of Life Outcomes*, 5, 59. <http://www.hqlo.com/content/5/1/59> (情報取得 2009/02/14)
- Fiske, M., & Chiriboga, D. A. (1991). *Change and continuity in adult life*. San Francisco: Jossey-Bass.
- フリック, U. (2002). 質的研究入門——〈人間の科学〉のための方法論 (小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子, 訳). 東京: 春秋社. (Flick, U. (1995). *Qualitative forschung*. Hamburg: Rowohlt.)
- Folkman, S., & Moskowitz, T. (2000). Positive affect and the other side of coping. *American Psychologist*, 55, 647-654.
- Fowler, J. W. (1981). *Stages of faith: The psychology of human development and the quest for meaning*. San Francisco: Harper & Row.
- フランクル, V. E. (1957). 死と愛——実存分析入門 (霜山徳爾, 訳). 東京: みすず書房. (Frankl, V. E. (1952). *Aerztliche seelsorge*. Wien: Franz Deuticke.)
- Frankl, V. E. (1963). *Man's search for meaning*. New York: Washington Square Press.
- Frankl, V. E. (1966). Self-transcendence as a human phenomenon. *Journal of Humanistic Psychology*, 6, 97-106.
- フランクル, V. E. (1979). 意味への意志——ロゴセラピーの基礎と適用 (大沢博, 訳). 東京: ブレーン出版. (Frankl, V. E. (1969). *The will to meaning: Foundations and applications of logotherapy*. New York: New American Library.)
- フランクル, V. E. (1993). それでも人生にイエスと言う (山田邦男・松田美佳, 訳). 東京: 春秋社.
- (Frankl, V. E. (1946). *...trotzdem ja zum leben sagen*. Wien: Franz Deuticke.)
- Friend, D., & Editors of Life. (1991). *The meaning of life: Reflections in words and pictures of why we are here*. Boston: Little, Brown.
- Fry, P. S. (1998). The development of personal meaning and wisdom in adolescence: A reexamination of moderating and consolidating factors and influences. In Wong, P. T. P., & Fry, P. S. (Eds.), *The human quest for meaning: A handbook of psychological research and clinical applications* (pp.91-110). London: Lawrence Erlbaum Associates.
- 藤井誠二・宮台真司 (編). (2003). この世からきれいに消えたい。——美しき少年の理由なき自殺. 東京: 朝日新聞社 (朝日文庫).
- Gabay, J. (Ed.). (1996). *The meaning of life: Revelations, reflections and insights from all walks of life*. London: Virgin Publishing.
- Gilligan, C. (1982). *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Greenberg, J., Koole, S. L., & Pyszczynski, T. (Eds.). (2004). *Handbook of experimental existential psychology*. New York: The Guilford Press.
- Grünberg, D. (2005). The meaning of life vis-à-vis the challenges of the present-day world. In Tymieniecka, A. T. (Ed.), *Analecta Husserliana* (Vol. 84, pp.13-31). Dordrecht, Netherlands: Springer.
- Hanfling, O. (1987). *Life and meaning: A reader*. Cambridge: Basil Blackwell.
- Hanley, S. J. (2002). Maslow and relatedness: Creating an interpersonal model of self-actualization. *Journal of Humanistic Psychology*, 42(4), 37-57.
- Harlow, L. L., & Newcomb, M. D. (1990). Towards a general hierarchical model of meaning and satisfaction in life. *Multivariate Behavioral Research*, 25, 387-405.
- Heine, S. J., Proulx, T., & Vohs, K. D. (2006). The meaning maintenance model: On the coherence of social motivations. *Personality and Social Psychology Review*, 10, 88-110.
- Hepburn, R. W. (2000). Questions about the meaning of life. In Klemke, E. D. (Ed.), *The meaning of life* (2nd ed., pp.261-276). New York: Oxford University Press.
- Hermans, H. J. M. (1998). Meaning as an organized process of valuation: A self-confrontational approach. In Wong, P. T.

- P., & Fry, P. S. (Eds.), *The human quest for meaning: A handbook of psychological research and clinical applications* (pp.317-334). London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Hermans, H. J. M. (2000). Meaning as movement: The relativity of the mind. In Reker, G. T., & Chamberlain, K. (Eds.), *Exploring existential meaning: Optimizing human development across the life span* (pp.23-38). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Hick, J. (2000). The religious meaning of life. In Runzo, J., & Martin, N. M. (Eds.), *The meaning of life in the world religions* (pp.269-286). New York: Oneworld Publications.
- Hospers, J. (1967). *An introduction to philosophical analysis* (2nd ed.). NJ: Prentice-Hall.
- 印東太郎. (1973). 心理学におけるモデル構成. 印東太郎 (編), *モデル構成* (pp.1-28). 東京大学出版会.
- James, L. (2005). Achievement and the meaningfulness of life. *Philosophical Papers*, 34, 429-442.
- Jenerson-Madden, D., Ebersole, P., & Romero, A. M. (1992). Personal life meaning of Mexicans. *Journal of Social Behavior and Personality*, 7, 151-161.
- Joske, W. D. (2000). Philosophy and the meaning of life. In Klemke, E. D. (Ed.), *The meaning of life* (2nd ed., pp.283-294). New York: Oxford University Press.
- Kahn, R. L., & Antonucci, T. C. (1980). Convoys over the life course: Attachment, roles, and social support. In Baltes, P. B., & Brim, O. G. (Eds.), *Life span development and behavior* (Vol.3, pp.253-286). San Diego, CA: Academic Press.
- 亀田研. (2003). 青年期の生きる意味への問いに関する探索的検討. 日本青年心理学会第11回大会発表論文集, 40-41.
- 神谷美恵子. (1980). *生きがいについて*. 東京: みすず書房.
- 川喜田二郎. (1967). *発想法*. 東京: 中央公論社 (中公新書).
- 川島大輔. (2005). 老年期の死の意味づけを巡る研究知見と課題. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 51, 247-261.
- 川島大輔. (2008). 老年期にある浄土真宗僧侶のライフストーリーにみる死の意味づけ. 質的心理学研究, 7, 157-180.
- Kenyon, G. M. (2000). Philosophical foundations of existential meaning. In Reker, G. T., & Chamberlain, K. (Eds.), *Exploring existential meaning: Optimizing human development across the life span* (pp.7-22). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Kim, M. (2001). *Exploring sources of life meaning among Korean* (Unpublished master's thesis). Langley, British Columbia, Canada: Trinity Western University.
- King, G. A. (2004). The meaning of life experiences: Application of a meta-model to rehabilitation sciences and services. *American Journal of Orthopsychiatry*, 74, 72-88.
- Kinnier, R. T., Kernes, J. L., Tribbensee, N. E., & Van Puymbroeck, C. M. (2003). What eminent people have said about the meaning of life. *Journal of Humanistic Psychology*, 43, 105-118.
- Klaassen, D. W., & McDonald, M. J. (2002). Quest and identity development: Re-examining pathways for existential search. *The International Journal for the Psychology of Religion*, 12, 189-200.
- Klemke, E. D. (2000a). Living without appeal: An affirmative philosophy of life. In Klemke, E. D. (Ed.), *The meaning of life* (2nd ed., pp.186-197). New York: Oxford University Press.
- Klemke, E. D. (Ed.). (2000b). *The meaning of life* (2nd ed.). New York: Oxford University Press.
- Klinger, E. (1977). *Meaning and void: Inner experience and the incentives in people's lives*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Kohlberg, L. (Ed.). (1981). *The philosophy of moral development: Moral stages and the idea of justice*. New York: Harper & Row.
- Koltko-Rivera, M. E. (2004). The psychology of worldviews. *Review of General Psychology*, 8, 2-58.
- 近藤勉. (1997). 生甲斐感への一考察. 発達人間学研究, 6, 11-20.
- 河野勝彦. (2002). *死と唯物論*. 東京: 青木書店.
- 熊野道子. (2003). 人生観のプロファイルによる生きがいの2次元モデル. 健康心理学研究, 16, 68-76.
- 熊野道子. (2006). 生きがいとその類似概念の構造. 健康心理学研究, 19, 56-66.
- 熊野道子. (2007). 生きがい対象の集中・分散による満足度・ストレス反応の相違——定年前後の男性の場合. 高齢者のケアと行動科学, 13, 1-9.
- Länge, A. (1992). What are we looking for when we search for meaning? *Ultimate Reality and Meaning*, 1, 306-314.
- Laverty, W. H., Pringle-Nelson, C., Kelly, I. W., Miket, M. J., & Janzen, B. L. (2005). Expression of life meaning among college students. *Psychological Reports*, 97, 945-954.
- Leontiev, D. A. (2007a). Approaching worldview structure with ultimate meanings technique. *Journal of Humanistic Psychology*, 47, 243-266.
- Leontiev, D. A. (2007b). The phenomenon of meaning: How psychology can make sense of it. In Wong, P. T. P., Wong, L. C. J., McDonald, M. J., & Klaassen D. W. (Eds.), *The*

- positive psychology of meaning and spirituality* (pp.33-44). BC: INPM Press.
- Levy, N. (2005). Downshifting and meaning in life. *Ratio*, 18, 176-189.
- Lin, A. (2001). Exploring sources of life meaning among Chinese (Unpublished master's thesis). Langley, British Columbia, Canada: Trinity Western University.
- Little, B. R. (1998). Personal project pursuit: Dimensions and dynamics of personal meaning. In Wong, P. T. P., & Fry, P. S. (Eds.), *The human quest for meaning: A handbook of psychological research and clinical applications* (pp.193-212). London: Lawrence Erlbaum Associates.
- ルーカス, E. S. (2004). ロゴセラピーの有効性. フランクル, V. E., 意味による癒し—ロゴセラピー入門 (山田邦男, 監訳) (pp.175-231). 東京: 春秋社.
- (Lukas, E. S. (1972). Zur validierung der logotherapie. In Frankl, V. E., *Ausgewählte vorträge über Logotherapie*. Verlag Hans Huber.)
- Lukas, E. (1981). A validation of logotherapy. *The International Forum for Logotherapy*, 4, 116-125.
- Maddi, S. R. (1998). Creating meaning through making decisions. In Wong, P. T. P., & Fry, P. S. (Eds.), *The human quest for meaning: A handbook of psychological research and clinical applications* (pp.3-26). London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Markus, A. (2003). Assessing views of life: A subjective affair? *Religious Studies*, 39, 125-143.
- Mascaro, N., Rosen, D. H., & Morey, L. C. (2004). The development, construct validity, and clinical utility of the spiritual meaning scale. *Personality and Individual Differences*, 37, 845-860.
- マズロー, A. H. (1987). 人間性の心理学—モチベーションとパーソナリティ (小口忠彦, 訳). 東京: 産業能率大学出版部. (Maslow, A. H. (1970). *Motivation and personality*. San Francisco: Harper & Row.)
- McAdams, D. P. (1985). *Power, intimacy and the life story: Personological inquiries into identity*. New York: Guilford Press.
- McAdams, D. P. (1990). Unity and purpose in human lives: The emergence of identity as a life story. In Rabin, A. L., Zucker, R. A., Emmons, R. A., & Frank, S. (Eds.), *Studying persons and lives* (pp.148-200). New York: Springer.
- McCann, J. T., & Biaggio, M. K. (1988). Egocentricity and two conceptual approaches to meaning in life. *The International Forum for Logotherapy*, 11, 31-37.
- Meier, A., & Edwards, H. (1974). Purpose-In-Life Test: Age and sex differences. *Journal of Clinical Psychology*, 30, 384-386.
- Metz, T. (2001). The concept of meaningful life. *American Philosophical Quarterly*, 38, 137-153.
- Metz, T. (2002). Recent work on the meaning of life. *Ethics*, 112, 781-814.
- Metz, T. (2007). New developments in the meaning of life. *Philosophy Compass*, 2, 196-217.
- 森岡正博. (2001). 「意味なんかない人生」の意味—フィッシュマンズ, 宮台真司を素材として. 竹内整一・古東哲明 (編), *ニヒリズムからの出発* (pp.196-215). 京都: ナカニシヤ出版.
- 諸富祥彦. (1997). *フランクル心理学入門—どんな時も人生には意味がある*. 東京: コスモス・ライブラリー.
- Morris, T. (1992). *Making sense of it all: Pascal and the meaning of life*. Grand Rapids, Mich: William B. Eerdmans Publishing Co.
- 村山達也. (2005). 人生の意味について—問いの分析の観点から. *哲学*, 113, 69-91.
- Murphy, J. (1982). *Evolution, morality, and the meaning of life*. Totowa, NJ: Rowman & Littlefield.
- ネーゲル, T. (2009). どこでもないところからの眺め (中村昇・山田雅大・岡山敬二・齋藤宜之・新海太郎・鈴木保早, 訳). 東京: 春秋社. (Nagel, T. (1986). *The view from nowhere*. New York: Oxford University Press.)
- Neimeyer, R. A. (Ed.). (2000). *Meaning reconstruction and the experience of loss*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Nielsen, K. (2000a). Death and the meaning of life. In Klemke, E. D. (Ed.), *The meaning of life* (2nd ed., pp.153-159). New York: Oxford University Press.
- Nielsen, K. (2000b). Linguistic philosophy and “the meaning of life”. In Klemke, E. D. (Ed.), *The meaning of life* (2nd ed., pp.233-256). New York: Oxford University Press.
- ニーチェ, F. (1993). 権力への意志 (原佑, 訳). 東京: 筑摩書房 (ちくま学芸文庫). (Nietzsche, F. (1906). *Der wille zur macht*. Leipzig: Naumann.)
- 西田幾多郎. (1950). *善の研究*. 東京: 岩波書店 (岩波文庫).
- O'Connor, K., & Chamberlain, K. (1996). Dimensions of life meaning: A qualitative investigation at mid-life. *British Journal of Psychology*, 87, 461-477.
- Orbach, I. (2007). Existentialism and suicide. In Tomer, A., Eliason, G. T., & Wong, P. T. P. (Eds.), *Existential and spiritual issues in death attitudes* (pp.281-316). New York: Lawrence Erlbaum Associates.
- Paloutzian, R. F. (1981). Purpose in life and value changes

- following conversion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 1153-1160.
- Pargament, K. I., & Park, C. L. (1995). Merely a defense? The variety of religious means and ends. *Journal of Social Issues*, 51, 13-32.
- Park, C. L. (2005). Religion and meaning. In Paloutzian, R. F., & Park, C. L. (Eds.) *Handbook of the psychology of religion and spirituality* (pp.295-314). New York: The Guilford Press.
- Park, C. L. (2007). Religiousness/spirituality and health: A meaning systems perspective. *Journal of Behavior and Medicine*, 30, 319-328.
- Patton, M. Q. (1990). *Qualitative evaluation and research methods* (2nd ed.). New Delhi: Sage.
- Peterson, J. B. (2007). The meaning of meaning. In Wong, P. T. P., Wong, L. C. J., McDonald, M. J., & Klaassen, D. W. (Eds.), *The positive psychology of meaning and spirituality* (pp.11-32). BC: INPM Press.
- Pinquant, M. (2002). Creating and maintaining purpose in life in old age: A meta-analysis. *Ageing International*, 27, 90-114.
- Prager, E. (1996). Exploring personal meaning in an age-differentiated Australian sample: Another look at the Sources of Meaning Profile (SOMP). *Journal of Aging Studies*, 10, 117-136.
- Prager, E. (1998a). Men and meaning in later life. *Journal of Clinical Geropsychology*, 4, 191-203.
- Prager, E. (1998b). Observations of personal meaning sources for Israeli age cohorts. *Ageing and Mental Health*, 2, 128-136.
- Prager, E., Savaya, R., & Bar-Tur, L. (2000). The development of a culturally sensitive measure of sources of life meaning. In Reker, G. T., & Chamberlain, K. (Eds.), *Exploring existential meaning: Optimizing human development across the life span* (pp.123-136). California: Sage.
- Pöhlmann, K., Gruss, B., & Joraschky, P. (2006). Structural properties of personal meaning systems: A new approach to measuring meaning of life. *Journal of Positive Psychology*, 1, 109-117.
- Quinn, P. L. (2000a). How Christianity secures life's meanings. In Runzo, J., & Martin, N. M. (Eds.), *The meaning of life in the world religions* (pp.53-68). New York: Oneworld Publications.
- Quinn, P. L. (2000b). The meaning of life according to Christianity. In Klemke, E. D. (Ed.), *The meaning of life* (2nd ed., pp.57-63). New York: Oxford University Press.
- Reker, G. T. (1992). *Manual of the Life Attitude Profile-Revised (LAP-R)*. Trent University, Peterborough, ON: Student Psychologists Press.
- Reker, G. T. (1994). Logotherapy and logotherapy: Challenges, opportunities, and some empirical findings. *The International Forum for Logotherapy*, 17, 47-55.
- Reker, G. T. (1996). *Manual of the Sources of Meaning Profile-Revised*. Peterborough, ON: Student Psychologists Press.
- Reker, G. T., & Chamberlain, K. (Eds.). (2000). *Exploring existential meaning: Optimizing human development across the life span*. California: Sage.
- Reker, G. T., & Fry, P. S. (2003). Factor structure and invariance of personal meaning measures in cohorts of younger and older adults. *Personality and Individual Differences*, 35, 977-993.
- Reker, G. T., Peacock, E. J., & Wong, P. T. P. (1987). Meaning and purpose in life and well-being: A life-span perspective. *Journal of Gerontology*, 42, 44-49.
- Reker, G. T., & Wong, P. T. P. (1988). Aging as an individual process: Towards a theory of personal meaning. In Birren, J. E., & Bengtson, V. L. (Eds.), *Emergent theories of aging* (pp.214-246). New York: Springer.
- Rokeach, M. (1973). *The nature of human values*. New York: Free Press.
- Runzo, J. (2000). Eros and meaning in life and religion. In Runzo, J., & Martin, N. M. (Eds.), *The meaning of life in the world religions* (pp.188-201). New York: Oneworld Publications.
- Runzo, J., & Martin, N. M. (Eds.). (2000). *The meaning of life in the world religions*. New York: Oneworld Publications.
- Ryff, C. D. (1989). Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 1069-1081.
- Ryff, C. D., & Essex, M. J. (1992). The interpretation of life experience and well-being: The sample case of relocation. *Psychology and Aging*, 7, 507-517.
- Sanders, S., & Cheney, D. R. (1980). Raising, answering, and analyzing question about life's meaning. In Sanders, S., & Cheney, D. R. (Eds.), *The meaning of life: Questions, answers and analysis* (pp.1-14). NJ: Prentice-Hall.
- サルトル, J. P. (2008). 存在と無——現象学的存在論の試み (松浪信三郎, 訳). 東京: 筑摩書房 (ちくま学芸文庫). (Sartre, J. P. (1943). *L'être et le néant: Essai d'ontologie phénoménologique*. Paris: Gallimard.)
- Schnell, T., & Becker, P. (2006). Personality and meaning in life. *Personality and Individual Differences*, 41, 117-129.
- Schwartz, S. H. (1992). Universals in the content and structure of values: Theoretical advances and empirical tests in 20

- countries. In Zanna, M. P. (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol.25, pp.1-65). New York: Academic Press.
- Schwartz, S. H. (2003). A proposal for measuring value orientations across nations. In *Questionnaire development report of the European Social Survey* (chap.7). http://www.europeansocialsurvey.org/index.php?option=com_docman&task=doc_view&gid=126&Itemid=80 (情報取得 2009/02/14)
- Seaman, D. (2005). *The real meaning of life*. California: New World Library.
- Showalter, S. M., & Wagener, L. M. (2000). Adolescents' meaning in life: A replication of DeVogler and Ebersole (1983). *Psychological Reports*, 87, 115-126.
- シンガー, I. (1995). 人生の意味——価値の創造 (工藤政司, 訳). 東京: 法政大学出版局. (Singer, I. (1992). *Meaning in life: The creation of value*. New York: The Free Press.)
- Smart, N. (2000). The nature of religion: Multiple dimensions of meaning. In Runzo, J., & Martin, N. M. (Eds.), *The meaning of life in the world religions* (pp.31-46). New York: Oneworld Publications.
- Smith, H. (2000). The meaning of life in the world's religions. In Runzo, J., & Martin, N. M. (Eds.), *The meaning of life in the world religions* (pp.255-266). New York: Oneworld Publications.
- Steger, M. F., & Frazier, P. (2005). Meaning in life: One link in the chain from religiousness to well-being. *Journal of Counseling Psychology*, 52, 574-582.
- Steger, M. F., Frazier, P., Oishi, S., & Kaler, M. (2006). The meaning in life questionnaire: Assessing the presence of and search for meaning in life. *Journal of Counseling Psychology*, 53, 80-93.
- Steger, M. F., Kawabata, Y., Shimai, S., & Otake, K. (2008). The meaningful life in Japan and the United States: Level and correlates of meaning in life. *Journal of Research in Personality*, 42, 660-678.
- 滝沢克己. (1969). 現代の事としての宗教. 京都: 法蔵館.
- Tamney, J. B. (1992). Religion and self-actualization. In Schmaker, J. F. (Ed.), *Religion and mental health* (pp.132-137). New York: Oxford University Press.
- Tännsjö, T. (1988). The moral significance of moral realism. *Southern Journal of Philosophy*, 26, 247-261.
- Taylor, R. (2000). The meaning of life. In Klemke, E. D. (Ed.), *The meaning of life* (2nd ed., pp.167-175). New York: Oxford University Press.
- Taylor, S. J., & Ebersole, P. (1993). Meaning in life in young children. *Psychological Reports*, 73, 1099-1104.
- Thomas, L. (2005). Morality and a meaningful life. *Philosophical Papers*, 34, 405-427.
- Thomson, G. (2003). *On the meaning of life*. South Melbourne: Wadsworth.
- Tolstoy, L. N. (2000). My confession. In Klemke, E. D. (Ed.), *The meaning of life* (2nd ed., pp.11-20). New York: Oxford University Press.
- Tomer, A., & Eliason, G. T. (2007). Existentialism and death attitudes. In Tomer, A., Eliason, G. T., & Wong, P. T. P. (Eds.), *Existential and spiritual issues in death attitudes* (pp.7-37). New York: Lawrence Erlbaum Associates.
- Tornstam, L. (1997). Gerotranscendence: The contemplative dimension of aging. *Journal of Aging Studies*, 11, 143-154.
- Trisel, B. A. (2002). Futility and the meaning of life debate. *Sorites*, 14, 70-84.
- 鶴田一郎. (1998). 「生きがい」の心理学へのアプローチ——「生きがい」という言葉の意味と、「生きがい」の心理学の目指すもの. 人間性心理学研究, 16, 190-197.
- 上田閑照. (1999). 実存と虚存——二重世界内存在. 東京: 筑摩書房 (ちくま学芸文庫).
- 上田閑照. (2007a). 哲学コレクション I 宗教. 東京: 岩波書店 (岩波現代文庫).
- 上田閑照. (2007b). 哲学コレクション II 経験と場所. 東京: 岩波書店 (岩波現代文庫).
- 上田閑照・柳田聖山. (1992). 十牛図——自己の現象学. 東京: 筑摩書房 (ちくま学芸文庫).
- 浦田悠. (2005). 実存的空虚感と人生観との関連——意味の源の多様性という観点から. 日本パーソナリティ心理学会第14回大会発表論文集, 127-128.
- 浦田悠. (2006). 人生の意味への問いについての語りの分析. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 52, 294-306.
- 浦田悠. (2007a). 生きる意味の類型・深さと実存的空虚感との関連——看護学生と大学生の比較から. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 53, 181-193.
- 浦田悠. (2007b). 人生の意味の心理学——その歴史と展望. 人間性心理学研究, 25, 207-215.
- 浦田悠. (2008). 人生の意味への問いの諸相——問いのきっかけや重要性, 自我体験との関連から. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 112-124.
- Van Ranst, N., & Marcoen, A. (2000). Structural components of personal meaning in life and their relationship with death attitudes and coping mechanisms in late adulthood. In Reker, G. T., & Chamberlain, K. (Eds.), *Exploring existential meaning: Optimizing human development across the life span* (pp.59-74). California: Sage.

- Velleman, D. (2005). Family history. *Philosophical Papers*, 34, 357-378.
- 脇本平也. (1997). 宗教学入門. 東京: 講談社 (講談社学術文庫).
- Wiggins, D. (1988). Truth, invention, and the meaning of life. In Sayre-McCord, G. (Ed.), *Essays of moral realism* (pp.127-165). New York: Cornell University Press.
- Wilber, K. (2000). Integral psychology. In *The collected works of Ken Wilber* (Vol.4, pp.423-717). Boston: Shambhala.
- Wong, P. T. P. (1998a). Implicit theories of meaningful life and the development of the personal meaning profile. In Wong, P. T. P., & Fry, P. S. (Eds.), *The human quest for meaning: A handbook of psychological research and clinical applications* (pp.111-140). London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Wong, P. T. P. (1998b). Meaning-centered counseling. In Wong, P. T. P., & Fry, P. S. (Eds.), *The human quest for meaning: A handbook of psychological research and clinical applications* (pp.395-435). London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Wong, P. T. P. (1998c). Spirituality, meaning, and successful aging. In Wong, P. T. P., & Fry, P. S. (Eds.), *The human quest for meaning: A handbook of psychological research and clinical applications* (pp.359-394). London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Wong, P. T. P. (2000). Meaning of life and meaning of death in successful aging. In Tomer, A. (Ed.), *Death attitudes and the older adult* (pp.23-36). New York: Routledge.
- Wong, P. T. P. (2007a). Meaning management theory and death acceptance. In Tomer, A., Eliason, G. T., & Wong, P. T. P. (Eds.), *Existential and spiritual issues in death attitudes* (pp.65-87). New York: Lawrence Erlbaum Associates.
- Wong, P. T. P. (2007b). Transformation of grief through meaning: Meaning-centered counseling for bereavement. In Tomer, A., Eliason, G. T., & Wong, P. T. P. (Eds.), *Existential and spiritual issues in death attitudes* (pp.375-396). New York: Lawrence Erlbaum Associates.
- Wong, P. T. P., & Fry, P. S. (Eds.). (1998). *The human quest for meaning: A handbook of psychological research and clinical applications*. London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Yalom, I. D. (1980). *Existential psychotherapy*. New York: Basic Books.
- 山田邦男. (1999). 生きる意味への問い——V. E. フランクルをめぐって. 東京: 佼成出版社.
- やまだようこ. (1986). モデル構成をめざす現場心理学の方法論. 愛知淑徳短期大学研究紀要, 25, 31-51.
- (やまだようこ (編)). (1997). 現場心理学の発想 (pp.151-186). 東京: 新曜社.)
- やまだようこ. (1988). 私をつつむ母なるもの——イメージ画にみる日本文化の心理. 東京: 有斐閣.
- やまだようこ. (2002). 現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス——「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に. 質的心理学研究, 1, 107-128.
- やまだようこ. (2006). 非構造化インタビューにおける問う技法——質問と語り直しプロセスのマイクロアナリシス. 質的心理学研究, 5, 194-216.
- やまだようこ・山田千積. (2006). 「ライフストーリーの樹」モデル——専門家と生活者の場所と糖尿病のナラティブ. 看護研究, 39, 51-63.

付 記

本研究は、文部科学省グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」、および文部科学省私立大学学術高度化推進事業・学術フロンティア推進事業の助成を得て行ったものである。

謝 辞

論文の作成にあたり、京都大学のやまだようこ先生および東京大学の遠藤利彦先生からは丁寧なご指導を賜りました。人間学の観点からは、大阪府立大学の山田邦男先生およびフランクル研究会の諸先生方、京都大学の齋藤直子先生から貴重なご助言を頂きました。発達心理学の視点からは、名城大学の榎本博明先生、名古屋大学大学院の杉村和美先生、亀田研氏および関係諸氏からの確なご示唆を頂きました。最後に、審査を通して査読者の先生方から丁寧なご指摘を頂きました。心よりお礼申し上げます。

(2008.5.2 受稿, 2009.2.10 受理)